

---

# 大番長～白き狼と紅き龍～

世紀末敗者寸前

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大番長〜白き狼と紅き龍〜

### 【Nコード】

N7332M

### 【作者名】

世紀末敗者寸前

### 【あらすじ】

200X年…

突如として日本の中心に開いた大穴  
通称「魔界孔」

その出現に伴い発生した天変地異により大地はネジ曲がり、海は別れ、日本は列島の姿を失ってしまった  
その最中、人に不思議な力が宿る傾向が生まれた  
その原因ともされるBストーン

特殊な力を使えるものを皆は特待生と呼び、畏怖した  
力こそが正義とされつつあった世の中で二人の特待生が関わること  
によって更なる混乱が生まれることとなった

聖城学園に転入してきた斬真狼牙、そして土御門琥珀…  
彼等の行動が今、日本の今を…未来を動かしていく

## プロローグ（前書き）

皆さん知っている方も多いと思いますが、このゲームの二次小説があまり見当たらないので書いてみようと思ったのですが…

こちらの小説も更新不定期です

尚且つ内容はワンパターンとも思えるチート主人公です

其れが気に入らないという方は閲覧を控えることをお勧めいたします

## ブローグ

ザアアアアア…

その日は少し強めの雨が降っていた  
もう梅雨の季節なのかもしれないな…

そんなことを思いながら琥珀はこれから通うことになる聖城学園に  
向かっている最中であつた

今までずっと一人旅をして…

それまではずっと家業の手伝いをしていたため、琥珀にとって初め  
での学園生活になるのだ

少なからず琥珀は楽しみにしているのだが…

ここ最近の世の中の動きをみる限りでは一般的な学園生活は期待で  
きそうになかった

B能力者が各地で目覚め、それらが非能力者である一般人を傷つけ  
たり、学園同士で争いを起こしていたりと…悪い情報しか入ってこ  
ないのだ

琥珀は目の前にそう言った輩がいたら即刻仕置きをしてきたのだが  
…正直もううんざりしていたのだ

B能力者を見れば見るほど…人間の醜さというものが表だって出て  
きているものしかないのかという印象しか持てなかった

「…ふう、全く。これから行く学園にも能力者はいるのかね…」

そんなことを考えていると、いつの間にか学園の校門前に着いていた

「……………」

さて、ここではどんなことがあるのかね…

「……誰？」

琥珀はふと後ろから声を掛けられたので後ろを見た

「……誰？」

「……いや、そう言うそつちこそ誰だ」

「俺は土御門琥珀。今日からこの学園で学ぶことになった」  
「……何！？お前も転校生なのか」

「そういう君も？」

「俺の名は斬真狼牙。いずれこの日本を変える漢だぜ！！」

「……は？」

狼牙「おい！何だその反応は！？」

「……斬真つて……もしかして……」

狼牙「ああ？知ってるのか？」

「……狼牙……だっけ？狼牙つて……お兄さん居る？」

狼牙「ああ、居るが……それがどうかしたのか？」

「やつぱり！！俺にも兄が居ただけ……その兄が良く俺に斬真豪  
つて言う親友が居るって良く話してくれたんだよ」

狼牙「へえ、そうだったのか……って『居た』って……」

「……前に病気で……」

狼牙「……そうか」

「……気にしないでね」

狼牙「分かった」

「……で狼牙はどうして日本を変えようと思ったの？」

狼牙「なら聞くが……琥珀は今の日本をどう思ってる？」

「……正直最悪だね。今のご時世、力がすべて物を言うようになってる。それは確かに自然の摂理においては正しいことなのかもしれないけど……俺は納得してないよ」

狼牙「なら、俺と一緒に日本を変えてみねえか？」

「……なら、少し実力を試させてもらってもいいかな？」  
狼牙「いいぜ、俺もお前の実力を知りたかったんだよ!!」

互いに拳を構え…

シュツ!!!

拳が二人の顔手前5mmで止まった

二人は一瞬で互いの隙を見つけ…そこを撃とうとした  
その攻撃を…一瞬で理解し合ったのだ

狼牙「へっ…お前、強いな」

「そう言う狼牙こそね よし、気に入ったよ。俺の力、存分に使ってくれ」

狼牙「へっ、これからよろしく頼むぜ、琥珀」

「おう!!…って、さっきから気になってたんだけど…そっちに居る狼の姿をした女の子は誰？」

狼牙「!!お前、どうして久那岐が女だって…」

「あゝ、俺の一族って人に見えざる者を見ることが出来る家系でね。俺はその一族の中で一番力が強いって言われてたんだよ。…で、この姿になったのって…もしかして…」

狼牙「ああ、魔界口だ」

「やっぱり……大変だな」

狼牙「へ、解決策はあるんだよ!!だから俺はそのためにも全国制覇をしなきゃならないんだ!!」

「ふふ…ということは久那岐さんは狼牙の女ってことだね」

狼牙「ああ、大事な幼馴染で…俺の大切な女だ」

「…羨ましいよ、そんな大切な存在が居る狼牙が」

狼牙「お前には居ないのか？」

「うん…今までずっと旅を続けている毎日だったからね」

狼牙「なら、これから作ればいいじゃないか!!」

「…そうは言っても…俺って女性と付き合う経験ないし…こんな女顔の男なんて好きになっくれる奴いないだろ？」

狼牙「そうか？お前確かに女っぽい顔だけど…男義は俺に負けないくらいに強いじゃねえか!!自分に自信を持て!!そうすれば自然に女はお前に寄って来るって!!」

「…狼牙がそう言うのならそうしてみよう」

狼牙「おう、じゃあそろそろ行くか!!俺達で…この学園に嵐を起こしてやるぜ!!」

「ああ!!」

狼牙と琥珀は共に学園に向かった

この二人の登場によって…この学園

聖城学園は大きく揺れ動くことになった



聖城学園編 その1（前書き）

短い…

もう少し長く書きたいけど…

難しいよね

## 聖城学園編 その1

教室に入り、自己紹介をする際、狼牙は当たり前のように全国制覇をするといった

それを聞いた瞬間、クラスの皆が狼牙を白い目で見るようになった琥珀もまた、狼牙に賛同して共に動くと言うと、やはりそんな顔をされた

それもそのはず、この学園は今闇崎アギトという特体生に支配をされていて、逆らうものは皆酷い目に会うということが知れ渡っているからである

だから大言を吐いた、琥珀と狼牙には近寄りたくないという気持ちで一杯一杯なのだろう。転校生に質問をしに来ないのだ

「…（やれやれ…特体生一人にこんなにおびえて…とんだ学園だな）」

「???」貴方達…間違ってもそれは大声でもう言わない方がいいわよ?」

狼牙「ん、あんたは?」

「???」私はこのクラスの委員長で日比生咲苗っていうの」

狼牙「へえ、あんたいい女だな」

咲苗「な、いきなり何を言ってるの!?!」

「プツ…くくつ…」

狼牙「あ、どうした?」

「いや…いきなり会ったばかりの女性を口説いてるから…今まで俺はそんな奴と会ったことがないから…それに…その狼牙にあんなに動揺している委員長さんの反応も少し面白くて…」

狼牙「はは、俺はこんな奴だからな」

「ハハハ 益々気に入ったよ、狼牙」

咲苗「と、ともかく!!!ここの番長はそういうことにはすごく敏感

なの！！だから…」

狼牙「心配いらねえよ」

「そうそう さっき気配を調べた感じだと、この学園には確かに強いB能力者は存在するようだけど、俺達はその程度の奴らには負けないし」

咲苗「と、とにかく忠告だけはしたからね」

そう言うとき早苗は二人の傍を離れて行った

「やれやれ…この学園の生徒は心の底までその番長とやらの浸食されているのかね」

狼牙「はっ、関係ねえよ」

「ふふふ…」

「???「おい」

「ん？」

「???「お前じゃねえ、斬真狼牙」

狼牙「あ、俺に何か用か？」

「???「俺は陣内兵太って言うんだ」

狼牙「ん、その陣内が何か用か？」

兵太「これだけは言っておく。委員長には手を出すな」

狼牙「はっ？あれはお前の女なのか？」

兵太「ちっ、違うが…」

狼牙「なら別にいいだろ。俺が委員長を口説いたって」

兵太「い、いいから！！委員長には手を出すな！！いいな！！！！」

そう言い残し…兵太も二人の傍を離れて行った

「…ふふふ、彼は見所があるね」

狼牙「そうか？」

「それでも人を見る目はある方だと思っけど？」

狼牙「…まあいいや。とりあえず、何から始めるか決めねえとな」

ガラッ！！

狼牙と琥珀がこれからの方針を話し合おうとした時…

執行部「日比生咲苗はいるか！！」

咲苗「は、はい…何か、用ですか？」

執行部「番長様がお呼びだ！！一緒に来てもらおうか！！」

狼牙「…何だ？」

「…さっきの話から推測すると…多分、番長が気にいった女生徒を執行部の部室まで呼び出して…性的なことでも強要させるんじゃないのかな？」

狼牙「……成程な」

「予測だから、確認してみる必要があるね」

琥珀が遠巻きに見ていた一人の女生徒に話を聞くと…

琥珀の推測は完璧といえるほど当たっていた

そして…もし、この呼び出しを拒否した場合、クラス全体が危うくなるかもしれないということも分かった

咲苗「わ、分かり…ました」

執行部「よし、なら…」

兵太「行く必要ないぜ！！委員長！！！」

執行部「何だ貴様は」

兵太「陣内兵太だ！！委員長は行かせないぜ！！」

執行部「ふんっ！！」

バキッ

兵太「ぐあ……」

兵太は一撃で崩れ落ちた

狼牙「…弱」

「……………」

執行部「ふん…無駄な時間を…」

兵太「まだ…まだだ…」

執行部「ふん…なら、今度は手加減せん」

兵太「クッ…（俺は…ここまでの男なのか…）」

狼牙「おっと…選手交代だ」

兵太「ぞ、斬真狼牙」

狼牙「へっ、熱いやつだなお前は…下がってる」

兵太「で、でも…」

「いいから、下がってな」

兵太「っ、土御門琥珀」

「琥珀でいいよ。長いし…ッと、陣内はさっさと後ろにいな」

兵太を後ろへと移動させ、二人は執行部員と向き合った

執行部「何だ、貴様らは。見覚えのない顔だな」

狼牙「へ、今日転校してきた斬真狼牙だ」

「同じく土御門琥珀。まあよろしく…ッと言っても君は忘れることのできない名前になると思うけどね」

執行部「はっ、生意気な!!」

狼牙「琥珀…こいつは俺一人でやる」

「はいはい…」

狼牙「ふっ!!」

執行部「なッ!!?」

バキッバキッバキッ!!!!!!

ドコッ!!!

兵太「す、すげえ…ワンパンで決めちまった」

咲苗「いいえ…3発よ」

兵太「えっ!？」

早苗「ほら、顔と鳩尾と腹部にあざが出来てるわ」

咲苗「本当だ…」

狼牙「へへ…こんなもんじゃないぜ?」

「やり過ぎだよ、まったく…」

ガヤガヤガヤ…

執行部員を倒した後、教室にいた生徒達がざわめき始めた

男子「おい…これはヤバいんじゃないか?」

女子「執行部員を倒しちゃった…」

男子「報復に来るんじゃないか?」

男子「ふざけんな!!俺達には関係ない!!」

男子「そうだそうだ!!」

男子「そうだ!!委員長とその二人を差し出せば!!」

咲苗「えっ…」

狼牙「……」

「やってみれば?」

男子「：何だと？」

「だからやってみればいいじゃないか？まあ、そんなことをすれば  
 そいつもこの馬鹿のような目に会うと思うぞ？」

男子「…確かに…斬真には勝てないかもしれないが…お前と委員長なら…！」

「前置きはいいから……かかって来な。ただし……」

死ぬかも知れないぞ？

男子「うおおおおおおおー！！！！！」

一人の男子生徒が椅子を持ち、琥珀に向かって振りかぶった

咲苗「あ、危な……」

早苗は反射的に目をつぶった

バキッ！！！！

何やら嫌な音が聞こえ……

恐る恐る目を開いてみると……

男子「……………」

「ハア、この程度なのか？」

床に気絶している男子生徒：

そして……先程の男子生徒が持っていたと思われる椅子が……

メラメラと燃えていた

パチンツ  
…

琥珀が指を鳴らすと、その椅子の炎は何事もなかったかのように消えていった

男子「こ、こいつらは…い、一体…」

女子「凄…」



## 始動

狼牙「お前だつて人のこと言えないだろ。今の蹴りは…」

「ハハハ…ゴメン、流石にこれはやり過ぎたかもね」

狼牙「まあ構わないだろ、自分の保身のことにしかな頭のない連中にはいい薬にはなったと思うぜ？」

兵太「…斬真狼牙…その白ラン…そのバツクル…もしかして【ホワイトフアング】か！？！それに…土御門琥珀のそのマントとさっきの炎…それに…目にもとまらぬ足技…お前は…【レッドドラゴン】か…！？」

狼牙「おう、俺も少しは有名なんだな」

「…出来ればその二つ名は呼ばれたく何だが…」

狼牙「どうしてだ？カッコいいじゃねえか」

「…何かどっかのカンフー映画かR - 15 指定映画みたいな名前だから」

ザワザワザワ…

先程よりも教室内のざわめきが大きくなった

ホワイトフアングとレッドドラゴン

共に有名なB能力者で学生の間ではかなり噂になっていた

それが二人も揃って同じ学園に入学したのだ

驚くのは無理はない

「さて…こんな場所じゃ色々と話せないから…何処か人のいないところでも行くか？」

狼牙「おお、そうだな」

二人が共に教室を出ようとした時…

咲苗「ま、待って!!」

咲苗が二人を扉の前でとうせんぼをしていた

狼牙「…何だ、まだ何か用があるのか？」

咲苗「お、お願いがあるの」

「了承」 一秒

狼牙「早っ!？」

咲苗「ま、まだ何も言っていないのに!？」

「まあこの状況と俺達の二つ名知った後に、入口を塞ぐ。これらの状況から理由を察することが出来るのはあたりまえなことだと思うが？」

狼牙「…お前凄いな」

「そうかな？まあとにかく…委員長さんが望んでるのって、俺たちに戦ってほしいってことだろ？この学園を支配してる番長と」

咲苗「…ううん、私と一緒に戦ってほしいの」

「へえ…」

狼牙「成程な。だがどうやって戦うんだ？委員長が戦えるのなら今までだってその機会はあったはずだ。今になって何故だ？」

「…狼牙、それは意地悪だよ？…とにかく、その閻崎アギトって言う奴は元はそれほど強い能力者じゃなかったけど、ある日を境に急激に強くなり、元執行部を制圧した後、こんな状況を作り上げたってわけね」

咲苗「うん…今までだって私も行動しようと思った…けど出来なかった…」

狼牙「今更聞くが、何でこの学園をそこまで？」

咲苗「確かに、ここ最近はいいい思ひ出なんてないわ。でも、この学園には私の…ううん、私達の思ひ出が詰まっているんだもん。だから…」

「……………狼牙？」

狼牙「かなり厳しいものになるかもしれないんだぞ？」

咲苗「…その覚悟はもう出来てるわ」

狼牙「やっぱ委員長はいい女だな。よし、なら今日から委員長も狼牙軍団の一員だ！！」

咲苗「あ、ありがとう」

「これからよろしくね、日比生咲苗さん」

咲苗「咲苗でいいわ。こちらこそよろしくね、土御門琥珀君」

「じゃあ俺も琥珀でいいよ」

狼牙「俺は委員長って呼ばせてもらっぜ」

咲苗「ええ、これからよろしくね、狼牙君」

狼牙「おう！！」

その後、陣内兵太と成瀬有紀が仲間になり、狼牙軍団は行動を開始することになった

## 主人公設定

土御門 琥珀 つちみかど こはく 17歳

通称、レッドドラゴン

歴代より陰陽師として名高い家計の家で生まれたのだが、その家系はB能力者を魔物と同一と考える者のいる固定観念が残っていたある日、琥珀がB能力に目覚めると、そう言った考えの持ち主は皆手のひらを返したかのように琥珀を殺そうとしたが、皆返り討ちにあった

その状況を危惧した琥珀の父が、琥珀に旅に出るように勧める琥珀も古臭い家にいるよりも外で見聞を広めたかったため直ぐに承諾する

その時、琥珀は14歳になったばかりだった元々敬愛する兄に鍛え上げられていた為、実力はかなり高い琥珀は旅を続けながらB能力を鍛え、その間にB能力を悪用する輩を倒していったが故に二つ名がつけられた

腰まで届く長く赤い髪に黒く透き通った目、黒いロングコートの下にはカスタマイズされた銃二丁に短刀4本、腰には脇差を仕込んでいるが、めったに使おうとはしない  
他にも体の至る所に暗器を仕込んでいる  
B能力は炎もしくはそれに準ずるものを自在に操る能力  
琥珀がもし本気で激怒したら、その対する相手はちりひとつ残らずに消滅する

普段はこの能力と足主体の格闘技で戦う

“ 秘義・ドラゴンクロー ”  
炎によって加速した蹴り

度合いによって相手を切り裂くことも可能  
付加効果によって切り口は発火する

好物は和菓子、特に羊羹と団子には目がなく、月に10度は専門店を訪れて大量に買っていくが、その逆として辛いものはかなり苦手  
で、もし辛い物を食べてしまったら、暴走を始める  
趣味として菓子作りをしたりする

今まで女性と交流を持ったことが殆どないため恋愛経験はほとんどないが、興味がないわけではない

実はかなりの情報網を持ち、その情報源は当人以外には固く秘められている

## 聖城学園編 その2

そして、ようやくこれからの行動方針を纏めようとしたのだが…

男子「俺達にも戦わせてくれないか!？」

女子「わ、私も…戦えないけど…何か出来ることはある?」

狼牙も俺もクラスメイト達に囲まれていた

先程の強さを見せ、これからの学園生活を変える可能性が見えたのか…

次々と狼牙軍団への参加を希望してきたのだ

勿論、狼牙も俺もその気持ちを受け入れ、一人一人出来ることや能力…また、他のB能力者についての情報を集めるなどをしていたら…昼休みになっていた

「ふう…とりあえず、この二階フロアに居る生徒達も大体が裏で協力をしてくれるかもしれないということになったな」

狼牙「これはいい出だしだな」

「その代わり、俺達が今後どうやって行動するか決めるのが遅れたがな」

兵太が言うには、この学園に居る能力者達の大半が番長に対して不満を持っている

だから、説得すれば協力を受け入れてくれるかもしれないということなのだが…

狼牙「…三階から行くか…それとも一階から行くか…それが問題だな」

「…ふむ、狼牙。提案があるんだが?」

狼牙「何だ?」

「俺は昔から単独行動が得意だったからな…そこで、俺は一人で一階に行って協力してくれそうな奴らを探してみる…その間、狼牙は

咲苗さん、兵太、有紀を連れて三階を占領しておいてくれないか？」  
狼牙「…大丈夫なのか？」

「心配するな。目立つ行動は控えるし、何かあっても脱出集団は用意しておくから。それに大半の戦力が三階に集中してれば一階に俺がいるなんて気付かないだろ」

狼牙「…確かに、同時に攻めるには今は戦力が圧倒的に足りないしな…琥珀、任せてもいいか？」

「おう」

こうして琥珀は一階へ

狼牙たちは三階へ向かうことになった

一階

「ふむ…まあこんな所だろ」

しかし…風紀委員は分かりやすい恰好で助かったよ  
似たような顔ばっかでキモイが…

刀も使い方も下手糞だし…

こんな連中に良く支配されてたものだ

一年女子「あの…大丈夫ですか？」

「ん…君たちこそ大丈夫かな？」

一年男子「はい…僕らは大丈夫ですけど…」

「俺は狼牙軍団の一人、土御門琥珀って言っただ。この学園の番長を倒すために行動してるんだけど…君達も協力してくれないかな？」

一年女子「え…でも…」

「…別に前線で一緒に武器を持って戦えなんて言ってるやないよ。ただ、君達は今の学園のままでいいと思ってるのかな？」

一年男子「…それは…」

「俺は今の学園を変えて…斬真狼牙の行く道を作り上げたい。でも、それを叶えるには俺一人の力だけではどうにもならないんだ。だか

「らこそ、俺は皆の力を借りたいんだ」

一年女子「…私達に何か出来ることはあるのでしょうか…」

「それは君たち自身が見つけるべきことだ。俺に出来るのは…この力を有効に使って…狼牙や皆の助けになるように動くこと。今はそれだけだ」

暫くの間、全員の間で沈黙が続いた

「…直ぐにこたえる必要などないが…出来るだけ早く答えて欲しくはあるかな？」

一年女子「…少し、考えさせてもらってもいいですか？」

「ん、当然。君達が君たち自身の意思で決めないといけないことだからね」

そう言い残し、琥珀はその場から立ち去っていった

暫くの間、琥珀はフラフラと学園内を歩くことにした

こうすることで学園内に居る戦力になりそうな生徒が見つかるかもしれない

そう思っただけで歩き続け…

「…体育館、ここって誰かいるのか（ブンツ）……居たね」

何かを振りかぶる音が聞こえ、その方に向かってみると…

竹刀を二本持った女子生徒が一人素振りをしていた

「……誰だい！？」

「ああ、邪魔したかな？俺は土御門琥珀。この学園に編入したばかりなんでね」

「……ああ、あんたがあの……」

「え…知ってるの？」

「……さっき執行部の連中があたしのここに来て協力しろって言



いに来たからね」

「あゝ、成程ね」

「???」でも、どうして執行部に目の敵にされてるんだい?」

「俺は今斬真狼牙つて言う俺と同じ編入生と一緒にこの学園の番長を倒そうつてことになってるから」

「???」はあ!? 閻崎を倒すつて…本気かい?」

「ああ、本気だけど?」

「???」……(じいゝゝゝ)「@琥珀の目を覗き込んでいます

「???」何?」

「???」嘘はついてないみたいだね」

「こんなこと嘘なんかじゃ言えないよ」

「???」それで…私に何か用?」

「いや、別に?」

「???」(ポカン)…い、一緒に戦おうとか…そう言うこと言いに来たんじゃないの?」

「俺は無理矢理誘ったりそう言うことが嫌いだから。当人の意志を尊重したうえで、一緒に戦うかと聞くし」

「???」あ、あはは あんた面白いね」

「?」そうかな?」

「???」…うん決めた!!! えゝつと…琥珀、だったよね?」

「ああ、君は?」

剣道「あたしは中西剣道。よかつたらあたしも一緒に戦わせてくれないかい?」

「ん、君がそうしたいのなら喜んで」

剣道「へへ、よろしくね。あ、それとあたしの妹も一緒に加えてもらってもいいかい?」

「ん、妹が居るの?」

剣道「ああ、弓道は今多分教室に居るから…一緒に来てくれるかい?」

「了解した」

その後、弓道のいる教室に案内され剣道と共に説得し、中西姉妹が狼牙軍団に加わってくれることになった

一方で、狼牙も屋上を制圧する際に知り合った宮里絵梨花、サキ、ショーコという三人組が仲間になってくれることになったそうだって言うか、三階だけじゃなかったのか…

狼牙、制圧力凄いな…

### 聖城学園編 その3

狼牙「へへ…少しはまともな軍団になってきたな」

「それはそうと…次はどこにする？選択肢としては体育館から制圧して、その後グラウンドに向かうということか、最初に正面玄関を制圧し、グラウンドって言う手もあるけど…」

狼牙「両方行けるんじゃないのか？」

「…まあ確かに行けるけどね…今はかなりの生徒が仲間になってくれし…」

琥珀が再び一年生たちを説得しに行った際に皆が協力してくれるということになり、その勢いで他の生徒たちにも協力を呼びかけたことにより、学園の約4割の生徒が狼牙軍団に入ってくれることになった

「…じゃあ、どう攻める？」

狼牙「うゝん…俺、委員長、兵太、有紀、絵梨花を中心に正面玄関を制圧した後、直ぐにグラウンドへ。で、その間、琥珀は剣道、弓ちゃん、サキ、シヨーコを連れて部室棟に向かうって言うのは？」

「…随分と俺の方はキツイな」

狼牙「お前が居るんだから大丈夫だろ？」

「まあな…唯その編成だと俺は直ぐにはグラウンドには向かえないぞ？大丈夫なのか？」

狼牙「平気だ。委員長や兵太、有紀も最初のころよりも強くなってるしな」

「…ならそれで行くか」

こうして琥珀は部室棟に…狼牙は正面玄関へと向かっていった

琥珀サイド

「やれやれ…これは大変なことになりそうだな」

剣道「そうは言ってもあれくらいの数ならなんとかなるんじゃないのかい？」

剣道が指差した方にはそれなりに多くの執行部員とそれに無理矢理従わされているような生徒達が居た

「…まあまずは執行部員達を潰して、他の生徒達には説得って感じで言ったほうがいいと思う。ここはあくまでも制圧するべきところの一つでしかないんだし」

剣道「あたしはそれに賛成だよ」

弓道「そ、そうですね…皆さん、執行部の方々に脅されてやっているという方が多いですし」

「…じゃあ後ろは任せてもいいかな？」

剣道「ああ…ってあれ？」

剣道の承諾を得る前に突撃を始めていた琥珀

剣道「たく…」

弓道「…お姉ちゃん…」

剣道「…何？……」@弓道が指した方を見て見る

琥珀が突撃したところは既に阿鼻叫喚と言ってもいいくらいに悲惨な光景が広がっていた

琥珀に武器を向ける者には琥珀が容赦なく蹴りを浴びせ…

脅えたものの武器を蹴りあげ…大声を出し、怯ませる

中西姉妹「……………」

サキ「あ、あの…」

シヨーコ「わ、わすらも突っ込んだ方がいいですか？」

中西姉妹「……………そうだね（そうですね）」

四人は琥珀がこじ開けた道を通り、執行部員を中心的に攻めたて…  
僅か数分後にはその場にいた生徒達を全員降伏させた

「…ふう、疲れた」

剣道「お疲れ様、って言うか幾らなんでも強引過ぎやしないかい？」

「これ位がちやうどよかったんだよ。出来ることなら狼牙たちと合流したかったしね」

「???」「ほわゝ、琥珀さん。この方たちは？」

「ああ、この人たちは皆俺達の仲間だよ」

「???」「そうなんですかゝ、こんにちはゝ。月読きなこといいいますゝ」

剣道「あたしは中西剣道。で、こっちは私の妹の弓道だよ」

弓道「よ、よろしくお願いします。琥珀さん、この人は？」

「ああ、さつき説得して狼牙軍団に加わって貰えるようになった人だよ」

きなこ「よろしくですゝ」

剣道「あ、ああ…よろしく」

きなこ「え、なんですか？ふんふん…成程。皆さん、グリモアちゃんも皆さんによろしくと言っています」

弓道「え、グリモアちゃんって???」

「あゝ、まあ分かんと思うが…きなこが抱えてるヌイグルミだ」  
「??????」

弓道「ぬ、ぬいぐるみはしゃべらないと思うのですが…」

「…何か変なものが憑いてるからなゝ」

きなこ&琥珀以外「「「「「……………へ?」「」「」」」」

剣道「へ、変なものって…」

「まあ簡単にいえば幽霊とか亡霊の類かな」

弓道「こ、琥珀さん…そ、それは冗談ですよね?」

「？本当のことだけど、ってああ。普通の人には見えないから信じられないよね」

剣道「こ、琥珀には見えてるのかい？」

「ああ、俺の家系は代々陰陽師だったからね。そう言ったものは普段から見えてるんだよ」

きなこ「なかなか話が合うので面白いです」

剣道「……」

「まあ、悪さをするわけじゃないからそんなに気にしなくてもいいと思うぞ？」

弓道「そう…ですか」

「とりあえずここは制圧したし…早く狼牙たちと合流しないか？」

剣道「そ、そうだね」

とりあえず体育館には協力をしてけると約束した生徒達を配置し、琥珀達は新たにきなこを連れ、グラウンドに向かうことにした

### 狼牙サイド

狼牙「へっ！！こんなものか？」

既に敵側の生徒の8割を倒し、グラウンドはほぼ制圧した狼牙たちは今は追撃戦に入っている最中だった

狼牙「ハッ！！」

バキッ！！

執行部員「ぐあー！！！！」  
ドサッ

狼牙「へっ、こんなもんじゃないぜ」

咲苗「狼牙君、こっちは皆狼牙君に降伏するって」

兵太「狼牙さん！こっちも全員降伏するって」

絵梨花「こっちも終わったよ」

狼牙「へっ、大したことなかったな」

「あ、狼牙、こっちも終わったみたいだね」

狼牙「お、琥珀じゃねえか。ってことはそっちも終わったみてえだな」

「ああ、それとこれから仲間になる人も出来たよ」

きなこ「きなこです」

狼牙「おう、よろしくな」

「早速だけど、ここの状況を詳しく教えてくれない？」

咲苗「とりあえずグラウンドの制圧は終わったみたい。ここがすんだら次に制圧すべき場所は体育館、部室棟（ボクシング部）、プール…そして…」

「奴のいる場所ってことだね」

剣道「でも閨崎のいる場所に行くにはIDがいるからね…多分、山本無頼なら持つてると思うけど…」

「確かボクシング部の部長をやってる人だったよね…仲間になってくれると嬉しいんだけどね」

狼牙「まあ説得してみないと分からないからな」

「…今後はどう動くか…それを決めないとね」

狼牙「とりあえず少し休息を取らないとな。勢いに身を任せてかなりの場所を一気に制圧したからな」

「じゃあ、とりあえず俺は情報を集めることに集中するから」

弓道「だ、大丈夫ですか？琥珀さんはずっと前線で動き続けてたは

ずなのに……」

「これ位で疲れるわけないでしょうに……そんな軟な鍛え方はしてないよ」

狼牙「……なら悪いが少し頼めるか？」

「ふふ、了解」

こうして狼牙たちは一時休息、その間琥珀は情報活動に移ることになった





一人の女子を7人の男達が集団で襲いかかろうとしてる場面に遭遇するなんて…俺って運が悪いのか……それとも…

男子生徒「な、何だお前は!？」

「…土御門琥珀だ。一応、狼牙軍団の一人なんだが…」  
男子生徒「……………ひい!」「……………」

えっ…なに？

俺の名前を聞いた途端に顔色が悪くなって…  
狼牙軍団って名前でしたら悲鳴を上げ始めたぞ？

男子生徒「れ、レッドドラゴン…」

男子生徒「お、鬼みたいに強いうえに情け容赦のない能力者…」  
「……………」

え、何それ…

俺の評価ってそんな酷いの？  
…結構傷つくなOrz

「…俺のことが分かったのならとつとと失せろ…目障りなんだよ」  
なんてドスの利いた声を出してみました

男子生徒「……………ひいひい……………!!!!お、お助け……………!!」  
「……………」

うわあ…ここまでビビられる俺って……

「…ハア、君大丈夫だった？」

「???」「あ、はい…ありがとうございます」

「気にしなくてもいいよ 俺は実際何もやってないし」

「???」「…あの…貴方があの噂の…」

「土御門琥珀って言うんだ。君は？」

「???」「あ、根岸ななです」

「じゃあなななって呼ぶね 俺のことは琥珀って呼んでよ」

ななな「はい…あの、琥珀さんはどうして学園の番長に…」

「倒すため」

ななな「え、でも…」

「最初から無理だと思って何もやらなかったら結果は何も変わらない。でも何かしら行動を取れば必ず結果は変わる。それが良くなるか悪くなるかは本人の力量次第だけだね」

ななな「……」

「さてと、こんなところにいつまでもいるわけにはいかないね…俺はさっさと仕事に戻らないと…」

ななな「あ、あの…」

「ん？」

ななな「わ、私を…ろ、狼牙軍団に…入れてもらえませんか？」

「…厳しい戦いになるよ？」

ななな「琥珀さんの言ったように…何もやらずにただ見てるだけなんて…もう嫌なんです…少しでも…少しずつでもいいから…私も…変わりたいんです…だから!!」

「ふふふ オツケ、俺から狼牙には話を付けるよ」

ななな「あ、ありがとうございます」

「これからよろしくね、ななな」

ななな「は、はい!!」

こうしてなななが狼牙軍団に加わり…  
一度琥珀はなななを連れ、狼牙の元へ

その後、琥珀は再び学園の情報活動に戻った

約2時間後…

「ただいま……つてあれ？」

「……はっはっは！！狼牙よ、この兄に任せておけ」

狼牙「……ハア」

久那岐「……グルッ」 狼牙にすり寄る

狼牙「ああ……大丈夫だ。心配するな、久那岐」

「……狼牙、戻ったよ」

狼牙「あ、琥珀か……情報の方はどうだ？」

「それなりかな……言い情報と悪い情報があるよ」

狼牙「……悪い方から聞く」

「ん、外から集めた情報なんだけどどうやら聖城学園がいの学園の動きが少し活発になりつつあるって噂を聞いた。恐らくだけど……【獄煉】がP G Gからの脱退を表明する可能性ありだよ。だから早めに闇崎を倒して、関東制圧に向けての準備を始めたほうが良さそうだね」

狼牙「……分かった、でいい情報って言うのは？」

「戦力になりそうな人たちのリスト。まず、山本無頼だけど……闇崎に対して良い感情は持っていないみたいだ。多分説得するなら仲間になつてくれるよ。他の能力者だけど……生徒からは後一人、堂本瑞貴って言う水泳部員の子。それから教員側にはフランシー又山咲先生と伊集院玉利先生が戦力になりそうなんだ。けど、この二人、何か仲悪いみたいで……どちらか一人のみしか仲間に出来そうにないよ」

狼牙「……とりあえず、先生のことはおいておいて……堂本瑞貴はプー

ルに居るのか？」

「そうなるね。でも早めに動いた方がいいかもしれないね。闇崎派の生徒が女子生徒達を陵辱しようとしてるみたいだったから。実際、俺がなななを助けた時もなななは危なかったし…」

突然名が出たせいなのか…なななは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった

狼牙「…ならプールには俺と委員長、絵梨花、久那岐で行ってくる」  
「ん、その間俺は剣道、弓道、きなこ、なななと体育館を制圧しておくから…ところで…さっきから大声で笑ってるあの人って…」

狼牙「…俺の兄貴だ…」

「……………」

何か…兄さんに聞いてた話と違う…

兄さんが話すには斬真豪は冷静沈着でいつも俺達を引っ張ってくれた頼れる人だって…

でも…何だろう、この人からは何か不安しか感じないのだが…

狼牙「兄貴…少し黙っててくれ」

豪「はっはっは！！ところで…その子は？」

狼牙「…土御門琥珀だ」

豪「……………」

土御門という性を聞いた瞬間、先程までの顔が嘘のように豹変した驚きを全く隠せていない表情だ

「…こんにちは、土御門翡翠の弟…土御門琥珀といいます」

豪「…そうか、あいつの話してた…翡翠は…元気か？」

「…病気で他界しました」

豪「……そうか」

「……兄は、ずっと俺に貴方のことを話していました…」

豪「………」

「……?どうか…したんですか?」

豪「い、いや…何でもない…」

…何か…俺の顔に着いてるのか?

豪「(…似ている…いや、似過ぎている…あの頃の翡翠をそのまま映したかのようだ…だが…目の色は異なる…アイツの色は…深紅だったからな…)」

聖城学園編 その4（後書き）

うーん…ネギまの方が書けなくなってきた

理由は二つ…

モチベーション

そして原作忘れた

こっちだと本が手に入らないから厳しい

他の小説などを参考にさせていただいてはいるんですが…

聖城学園編 完・・・そして舞台は新たな展開へ

琥珀の情報から狼牙はプールに向かうと陵辱されかけている堂本瑞貴がいた

いや…当の本人はそんなことお構いなしに占いの本を見ていたそうだが…

ある意味大物だな…

まあ占いの結果で狼牙と一緒にいることがいいという結果が出たそうで…一応仲間になるってことになったけど…なんだかなあ…

その後、狼牙は俺と咲苗さんを連れ、保健室に向かうことにした  
まずは話をしてみることにしてみようということになり二人の先生に順番に会いに行くことになったのだ

まあ結果としては…何故か俺の容姿を見て…何か惹かれたのか…フランシー又先生は速攻で協力を承諾した

その間、俺は寒気が治まらなかった…

何だろう、この感じ…

その後、一応俺達は伊集院先生の元に向かい…

何故か伊集院先生もフランシー又先生と同じ反応をした…

……正直、気分が悪い…

伊集院先生もフランシー又先生と同配置でなければ協力してもいいということは何故か二人の先生の力を借りることができた…

何か針の筵を着こんでしまった気分にはなったが…





狼牙「……何だ、この情けない奴は……」

「あゝ、狼牙にも見えないんだね。今、山本さんの後ろに30代後半のボクシンググローブ装着したおっさんがいるんだよ」

狼牙「???何言ってるんだ、そんな奴いねえじゃねえか」

「まゝ、幽霊だしね」

狼牙「???」

「多分、山本さん霊感が普通の人よりも強いから見えない物が見えちゃうんだろうね」

狼牙「つまり霊感が強いってことか？」

「加えてどうやら山本さん自身幽霊とかそいつたものが酷く苦手みたいだね。だからあんな風に脅えてるんだよ」

狼牙「…お前も見えてるのか？」

「一応ね。ねえ、山本さん。もし狼牙軍団の一員となって力を貸してくれるのならその幽霊が見えてる状態をどうかしてあげようか？」

山本「ほ、本当か!？」

「嘘は言いませんよ。どうしますか？」

山本「分かった!!。だから早くこれを!!」

うわぁ…必死過ぎるよ

「とりあえず…信頼の証としてIDを渡してもらえますか？」

山本「分かった。斬真狼牙。これがそのIDだ。これからはよろしく頼む」

狼牙「ああ。糸目男爵」

山本「な、何だそれは!？」

狼牙「ん、何っってお前の渾名だが」

山本「い、糸眼って…OTZ」

「…狼牙もう少しまともなあだ名にしてやろう」

山本「おお」

「せめてぶっちーとか」

山田「何か嫌だあああああー！ー！ー！！！」

「じゃあライライ」

山本「何だそれは！？ 何故そんなあだ名になる！？」

「じゃあ糸眼ということで決定ね。もうめんどいから」

山本「…もう糸目男爵でいいです」

無頼は悲しみを背負った

12の経験値を得た

謎のアイテムを手に入れた

無頼「ちよつと待て！？ 何だこの謎のアイテムって」

「ん、ああ。説明し忘れたな。これは一応、糸目男爵の靈感を抑える役割を持ってるんだ」

無頼「…そういえば、見えない！ さっきまで見えてた幽霊が見えないぞ！！」

「それをちゃんと体に身につけてれば霊達も寄ってこなくなるから。でも、幽霊スポットとか霊の集まり易い場所にはいかないでね？」

無頼「？ 何故だ？」

「時にそういう場所って霊の住処だったりするんだよ。で、そのアイテムは霊にとって毒のようなものだから…危険視されて殺されちゃうかもしれないから」

無頼「ひいひい！！」

「あ、でも対呪の効果も持ってるから余程強い霊じゃない限り大丈夫

夫だよ」

無頼「そ、そうか…」

「それよりもこれからよろしくね、山本無頼先輩」

無頼「ああ、俺の拳、お前らに預けた」

こうして山本無頼、伊集院玉利、フランシーヌ山吹、堂本瑞貴が仲間に加わり、更に他の生徒の7割が仲間に加わることとなった

「さてと…狼牙？　これで後、残ってるのは執行部の残党と闇崎アギトのみだ」

狼牙「ああ、一気に終わらせようぜ（ボキボキ）」

「ストップ」

狼牙「ああ？　何だよ」

「狼牙は大將なんだから、闇のアギト（笑）と一騎打ちしてもらわないと。だから、残党の1掃は俺を中心に任せてもらえないかな？」

豪「その意見には俺も賛成するぞ、狼牙よ」

狼牙「兄貴…そうだな、任せても良いか、琥珀」

「ふふ、了解した。メンバーは俺、剣道、弓ちゃん、きなこ、糸目男爵、兵太、有紀、ななな、瑞貴で残ってる咲苗さん、絵梨花、シヨコ、サキ、久那岐さん、豪さんは念のため狼牙の周りにいてもらおう。先生達にはそれぞれ学校への説明をしてもらってるから」

咲苗「説明？　其れって何の…」

「あはは　それは後のお楽しみだよ、咲苗さん」

狼牙「例の件、もう手配したのか…早いな」

「案外簡単に先生が二人も協力してくれることになったからね。交渉が楽になったんだよ、後は狼牙が番長倒して契約完了って感じかな」

狼牙「よっしゃ、そういうことなら話が分かり易くて良い」

「頼むよ、ホワイトファング」

狼牙「そっちこそしくじるなよ？ レッドドラゴン」

こうして聖城学園最後の戦いは始まったのだが…

実際、そこまで苦戦するというものではなかった

実は攻める直前日和見していた学生達が狼牙軍団に加わりたと言ってきたのだ

これにより、聖城の9割以上の生徒達が狼牙軍団に参加したということになった

数も質も勝る狼牙軍団

それにより、完全に戦意を失っていった執行部の生徒は次々と無条件降伏してきたのだった

狼牙「…つまらねえな」

「まあまあ、戦わなくてもいいって言うのは一番良いことだよ」

狼牙「まっ、そうなんだけどな」

「それよりも…（バキッ）」

狼牙「ああ、こいつにはとことん地獄を味わってもらわないとな…

（バキッ）」

アギト「ひ、ひいいいいい…」

調子づいた狼牙たちは無頼から受け取ったIDを使用し、闇崎アギトの居る地下室まで入り込み、アギトと直面することになった  
勿論、最初に始まったのは口上戦

だが、その際アギトは言っではならない禁句を言ってしまった

狼牙に【茄子頭】

琥珀に【男女】と…

最初こそ、そんな低俗な悪口はどつと思わないようにしようとし、  
狼牙を止めていた琥珀だったが…

【本当にちこ付いてんのかぁ？】とか【男に抱かれてる】とか  
【その茄子と出来てるんだろ？】などと言われ続け…

比較的、狼牙よりも温厚な琥珀も…

ブチッ！！！！

キレた

そして二人によってフルボッコ

最後の手と学生ボタンに手をかけようとしたが、琥珀がそれに気付  
き懷からワイヤーを取りだし、それを使ってボタンを奪取  
一気に形勢が逆転し…現在

バキッ！！ グシャッ！！ ドカッ！！

狼牙「おらおらおらおらおらおらおらおら――!!」

シュシュシュシュシュシュ！！！！

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！」

アギト「ぎゃあああああ——！！！」

パンチと蹴りのラッシュを浴びるはめになったアギトだった

こうして狼牙たちの最初の戦いは幕を閉じた

因みに……アギトは全治半年の重症を負った

その後、狼牙は久那岐に学生ボタンを使って元の姿に戻そうとしたのだが、一つでは足りないということが分かり、もつとボタンがいくつあるかを理解していた時……

琥珀はといふと...

「俺は女じゃないしちゃんとちこだつてついでるもん…機能だつてするし…ピ　なことだつて定期的にしてるもん…ああ、この女顔が悪いのか…こんな顔に生まれてきてるから俺はあんなこと言われるのか。でも顔つて髪とかと違って変えようがないし…ど

うしろってんだよ…」

蝶ネガタイプになってた

剣道「うわぁ…誰かあの琥珀どうにかしなよ」

ななな「ど、どうにかと言われても…」

きなこ「うわぁ…何だか今の琥珀さんの雰囲気連れられてグリモアちゃんのお友達が沢山寄ってきてますね」

「うつづ…ふう、ちょっと外の空気吸ってくるね」

何か体からドナドナや荒城の月、魔王辺りの曲が流れているのではないかと思える位に暗い雰囲気を持ったまま琥珀は気分転換の為外に出ることにした

無論、それを止められる生徒は誰一人としていなかった

加えて、アギトを倒し簡単な事務処理や後片付けを終えた後、狼牙は皆を校庭に集め大演説会を開き、全国に進出する決意を表明し皆の指示を得たのだが…

その場に琥珀が居なかったことに気が付いたのはすべてが終わった後だった

河川敷

「ふう…ようやく落ち着いたな。あゝ、かなり久しぶりに切れたよ



本当に…一応俺も男だから男の沽券に関わることを馬鹿にされたかなあ。まあもう大丈夫だろう」

その割にはかなり長い間この場所にいたようだった

琥珀の近くには空き缶やお菓子の山が…

どうやらやけ食いしていたようだ

「さて…そろそろもど（ゾクッ）ッ！！！」

琥珀は急に今まで感じたことのない寒気を感じた

自分はこれまで様々な場所を渡り歩き、色々な人々と関わりを持ってきたと思っていた

だが、その人生の中これ程の寒気を感じたことは未だ嘗てなかった…いや、違う

この気配は…昔どこかで？

その方に頭を向けてみると

そこには二人…いや、正確には男性が女性を抱っこした状態で立っていた

「…（ヤバイ、良く分からないけどこの男性はかなりやばい）」

冷えた視線、虚空ではないが氷のように冷え熱をも奪いかねない輝き

「……ふ」

「？ 貴方は一体」

「……君はどうやら【資格者】のようだ」

「……何を言ってるんだ」

「……この娘、貴様に預けよう」

「はい？」

「……クツ…奴が来る。ではな、また会おう。土御門の血を引きし者よ。ザンマの血を持つ者によく言っておけ」

「ッ！？」（こいつ…もしかして）」

その男は宣言通り琥珀の前に抱えていた女性を置くと、まるで幻だったかのように消え去ってしまった

「…あいつ、もしかしたらあの事を… それよりも今は…」

琥珀は自分の目の前に置かれた女性の体の状態を確認することにした  
頭部から血が出ている…恐らく脳を強く打ったから今は気絶している  
だけなのだろう

加えて全身にある切り傷や火傷のあと…

何処かで戦闘でもあったのではないかと思える傷跡

そして何より琥珀が驚いたのはこの女性が着ている服だった

この特徴的な服のデザイン

間違いなく、京の護国院のものだった

何故彼女は今日からわざわざ離れたこの闘京まで来たのか  
そもそも彼女は どうしてこんな怪我をしているのか？

あの男との関係は何なのだろうか？

疑問に思えば思うほど彼女が只者ではないということが良く分かった

「…とりあえず聖城に（ゾクッ）殺気ッ!？」

琥珀は急ぎその場を離れ、自分がつい先程までいた位置を見てみた  
するとそこには立派な刀があった

もし少しでも反応が遅れていたら自分は今頃真つ二つになっていた  
だろう

其れを握っているのは先程まで完全に気絶していたと思っていた女性  
性だった

「???「ヴヴヴヴ…」

「? 理性を失ってるのか?」

「???「コロサナケレバ…コロサレル」

「…成程ね、ここに来るまでかなり厳しい道のりだったみたいだね  
（加えて彼女の過去に何かあったんだろうねこれは…今度、護国院  
について念密に調べてみよう）」

「???「うあああああー!!!」」

「ツと、あぶねえ!？」

再び斬りかかってくる女性

其れをそれとなく避ける琥珀

だが…琥珀もただ避けていたわけではなく…

「???「!?(ギギギツ)」

「ふう、理性失ってるみたいだったから簡単に引っ掛かってくれてよかったよ」

琥珀は避けながら、ワイヤーを彼女の体に巻きつけていき見動きを封じることになったのだ

だが、そんな状態になってもその女性は懸命にその場を動かそうとしていた

「……」

ザッザッ…

ゆっくりと…

琥珀はその女性に近づいていった

「???「クルナ…クルナ!」」

「(ギユツ)」

「???「…え」

「大丈夫だよ、君を傷つける気なんてないし。今ここには君のことを襲おうなんて人はいないから」

「???「…あ」

「だから、少し休んでいいんだよ」

琥珀は優しく、ゆっくりと女性に語りかけ、説得していった

次第にその女性も琥珀の声に反応し、落ち着きを取り戻した後に寝入ってしまった

「ふう」

その場が何とかなったことを確認すると、琥珀はようやく一息入れることが出来た

「本当に…この学園に来てから退屈しないね」

少し休んだ後、琥珀は女性をお姫様抱っこして学園に連れて行った勿論、そのことで狼牙たちに言及されたのは言うまでもなかったのだが…

何故か一人、斬真豪の顔が少々変化したのを琥珀は見逃さなかった

## 暫しの休息（前書き）

うゝむ…こっちはやっぱり古いゲームのせいかな読者少ないですね  
まあ私自身がこのゲームに思い出るので書き続けますけど…  
ランスとか戦極姫の方が良いのかな？  
どちらも好きですけど…

## 暫しの休息

狼牙「で、何だったんだあの女は？　しかも琥珀、せっかく全国進出宣言の際にお前が話す時間も作ってたって言うのにいなかったし」

「なはは、悪い悪い。ちょっと久しぶりに心にダメージ負ったから外で少しの間、休息を取ってたんだ。でも、戻ってこようとした時、急に強い寒気を感じたからその先を見てみたら2人の男女が居たんだ。そのうちの一人が俺の連れてきた彼女ってわけ」

豪「二人？　もう一人の男はどんな奴だったんだ？」

「…それが、不思議な男で危険な男としか言えないですね。特徴的なのはとてつもなく高い身長とまるで氷のような目付きと長い髪…そうですね、ちょうど久那岐さんと同じ銀髪…だったと思います」

狼牙「だったと思うって…中途半端だな」

「仕方ないだろう、寒気と同時に強い殺気を感じたんだから。あれだけの嫌な予感は今まで二度目なんだよ…ってどうしたんですか、豪さん？」

豪「い、いや…なんでもないよ。（まさか…な）」

自身の報告を終えた後、咲苗が保健室から出てきた  
どうやら助けた女性の傷の手当ては終わったようだ  
因みに琥珀はすり傷一つ負っていなかった為、治療の必要はなかったのだが…

咲苗「怪我の状態はもうそれほど酷くないみたいよ。フランシーヌ先生に一応見てもらったけど、深い傷もないから後は目が覚めるのを待つだけみたい」

「そうか…良かったよ」

咲苗「でも…いいの？ あの制服って」

「護国院の者だっって言いたいでしょ？」

狼牙「護国院？ どこだそれは」

「京を中心に強大な勢力を保持する勢力だよ。近年は近代化の波に押されつつあって、権力も薄れつつあるけど、昔は異常ともいえる位の権力を保持してたんだ。その最大の理由が呪的守護。成功祈願や占いを生業にしているんだよ」

狼牙「へえ」

咲苗「詳しいのね、琥珀君」

「旅の最中色々話は聞いてるからね。因みに主な傘下学校559校。総学生数は28422人にも及ぶようだ。」

幹部の数も凄いし、こちらは番長以外にも総長や忍者部隊、噂だと凄腕の剣士もいるって言われてるよ」

豪「……」

「まあそんな中、俺にも分からない単語があったんだ。それが…【封印の巫女】」

狼牙「？ 【封印の巫女】何だそれ？」

「さあ？ 文献で調べても全く分からないことだったんだ。多分、誰かが意図的に閲覧や調査出来ないように仕向けているんだろって…この言葉、俺昔どこかで聞いたことがあるような気がして…」

豪「誰からだ？」

「兄さんですよ。兄は死ぬ前に俺に色々な事を教えてくれたんです」  
豪「そうか…」

他にもいくつか疑問に思うことを挙げていく琥珀  
そんな中…



ガラッ…

「……」

「あれ？ あなたはもう起きても大丈夫なんですか？」

「……」

「そうですか、怪我の方も大したことがないそうで良かったです」  
「……」  
「えっと…私のことをここまで運んでくれたのは、貴方ですか？」

「ええ、俺は土御門琥珀と言います。貴方は？」

「……」  
「京堂扇奈と申します」

「では扇奈さんと呼ばせてもらっても？」

扇奈「出来れば呼び捨てをお願いします。私は琥珀さんと呼ばせてもらいますね」

「分かった。じゃあ扇奈、いくつか聞かせてもらいたいことがあるんだけど……」

扇奈「…多分、答えできるのは少ないと思います」

「？ 何故だ」

扇奈「実は…私は、名前以外のことを思い出せないんですよ」

狼牙「記憶喪失ってやつか？」

扇奈「はい…最後に覚えているのは強い衝撃が私を襲ってきたというくらいで……」

「…それが怪我の原因だと？」

扇奈「恐らくですが……」

話を聞いているうちに琥珀は扇奈が何か隠していると感じ取った  
そんなに都合よく記憶がなくなるのだろうか…否

多分、こちらに知られたくないことがある為、それを隠しているの

だろう

狼牙や豪の顔からもそう考えているということが分かった

狼牙「じゃあ、扇奈はこれからどうする予定なんだ？」

扇奈「…分かりません」

狼牙「そうか。なら扇奈、俺か琥珀の女にならねえか？」

「…は？」

扇奈「え、ええと…」

狼牙「その服装は護国院の物らしい。京まで行くにはまだ時間は掛かるだろうが、俺たちはいずれ全国制覇する。だから、俺達と一緒に来ればいずれ京に行く。それに扇奈一人で外に出るのは色々危険だしな」

「ろ、狼牙？ それに関しては俺は賛成だけど…どうして…そ、その」

狼牙「ん？ だってこんなにいい女なんだぜ？ 放っておくのは野

暮だろう」

咲苗「ちょ、ちょっと斬真君！！」

扇奈「分かりました 私は…」

一息間が空き…

扇奈「…琥珀さんの女になります」

「は、はあああああーーーー！！！！？」

琥珀の絶叫が聖城学園に響き渡った

まあ琥珀の声は中性的だから絶叫というよりも悲鳴に近いのだが…

「な、何で俺なの!？」

扇奈「琥珀さんは私のことを助けてくれました…それに体が覚えてるんです。私、琥珀さんと戦いましたよね？」

「あ、ああ…まあね」

扇奈「私、強い男の人が好きなんです。琥珀さんはお強いんですよね？」

「…どうだろ」

狼牙「琥珀は狼牙軍団の副長をやってるんだぜ？しかも、通り名が【レッドドラゴン】って言われる位の実力の持ち主だ」

扇奈「そうですか　という訳でよろしくお願いしますね、琥珀さん」

「…まあとりあえず女とかそういう関係は置いておいて…仲間という関係から始めようよ」

扇奈「仲間…ですか？」

「…俺、狼牙と違ってそういう関係とは疎かったから、そ、その…な、慣れてなくて／＼」

扇奈「ふふ、良いですよ　ですが…」

「……？」

扇奈「琥珀さんのその態度、益々気に入りました　ですから、少し強気に攻めさせてもらいますね」

「お、お手柔らかに…」

こうして京堂扇奈が狼牙軍団に加わり更に戦力がUPした

咲苗「ホッ…」

狼牙「ん、どうした委員長？」

咲苗「な、何でもないわ」

狼牙「ははーん。さては扇奈が加わったらどうしようって考えたのか？」

咲苗「な、なななななな！！！！？」

狼牙「ふふ、可愛いぜ委員長」

咲苗「ちよ、ちよっと…アン、こ、こんなところで…」

突然いちゃいちゃし出す狼牙と咲苗

それから逃げ出すように琥珀は扇奈の為の部屋を手配する為に扇奈の手を引きその場を離れていった

狼牙「今日は委員長の部屋に行かせて貰おうか」

咲苗「う、うん…／＼／」

甘ったるい空間が二人を包み込んだ

一方で、先程甘い空間から逃れた扇奈と琥珀はというと…

「ふう、勘弁してほしいよ狼牙は…もう少し自粛して欲しい」

扇奈「あの…琥珀さん？」

「えっと？どうかした？」

扇奈「えっと、私の部屋に案内していただいた後、是非琥珀さんの部屋に行きたいのですが…よろしいですか？」

「良いけど、何もないから面白くないよ?」

扇奈「いえ、琥珀さんの部屋だから行きたいんですよ」

「ん、この後だったらななんと剣道、それにきなこも来る予定だけど…それでもいい?」

扇奈「お仲間の方ですよ? それにしても…女性の名前ばかりですな…」

「多分、皆今日俺が作ったお菓子を目的としてるのだろうけど」

扇奈「お菓子…ですか? しかも自作…」

「扇奈も食べる?」

扇奈「ええ、是非」

扇奈の部屋に着き、そこで模様替えをするために専門家を呼んだのだが、あるうことが洋室を完全和室に変えて欲しいというのが扇奈の希望だった

最初はそれは幾らなんでも無理だろう…などと思っていた琥珀だったが職人さんは任せてくれの一言だった

…職人さん凄いですね

手配を終えた後、扇奈と共に自室に戻る琥珀

部屋に入ると既にそこには剣道、きなこ、ななの三人がくつろいでいた

琥珀の部屋は和洋折衷になっていて、半分が畳で半分がフローリングとなっていた

寝るときは布団で、食事や勉強などはフローリング上のテーブルで生活していた

「もう来てたのか。ってあれ? 剣道、弓ちゃん?」

剣道「ああ、弓道なら今ちよつとね。つて琥珀、その後ろの女は？」  
「ああ、紹介するよ。彼女は今日から狼牙軍団に入ることになった」  
扇奈「京堂扇奈と言います。よろしくお願いしますね」

剣道「ああ、あたしは中西剣道だよ」  
きなこ「私は月読きなこです」

ななな「あ、あの…根岸ななと言います…そ、その…よろしくお  
願います」

「んじゃあ自己紹介序に少しの間会話でも楽しんでいてくれ。俺は  
その間、今日の菓子を用意でもするから。お茶は何が良い？」  
扇奈「では緑茶で」

剣道「玉露で頼むよ」

きなこ「アッサムティーで」

ななな「え、えつと…じゃあ、アールグレイを」

「…相変わらずバラバラなんだな。まあ良いけどさ」

そんな我儘な注文にも全く文句ひとつ言わずにキッチンに立つ琥珀  
しかも自前エプロンまでして本格的にやる物だから

「…「…いい」」」

その場にいた女性4人が認めるほど、その姿が似合っていた  
琥珀は料理をする際は長い髪が邪魔になる為、一つにまとめている  
つまりはポニーテールだ

加えて顔は中性的な顔立ちなため、そんなことをしていると女性に  
見間違えるのも無理はないだろう

実際に調理室や家庭課室で料理をする際、男女問わず琥珀に見とれ  
てしまうこともしばしばあったようだった

きなこ「やはり琥珀さんにはあの恰好は似合いますね」

剣道「そうだね、女のあたしたちですら綺麗だと思っちゃうくらいだからね」

ななな「そ、それに…琥珀さんが作る料理、凄く美味しいですし…」  
扇奈「そうなんですか？」

きなこ「ええ、きなこ達も幾度か御馳走になっているのですが…何とも癖になる味で」

剣道「そうそう！ あゝ、あのマールボーカッカレーを思い出すと…  
(じゅるっ)」

ななな「け、剣道さん、涎垂れてますよ(ふきふき)」

剣道「わ、悪いね。でもあの味は反則だったよ」

きなこ「きなこはあの白玉餡蜜が好きですね」

ななな「わ、私は…オリジナルスペシャルクレープが好きです」

扇奈「そ、それは全部琥珀さんが自分で作ったんですか？」

きなこ「ええ、何でも旅の最中様々な場所でアルバイトしたり、色々な場所で自炊してたりしたらしく、料理洗濯などの家事はかなり得意らしいです」

ななな「だ、だから琥珀さんの部屋はいつも凄く綺麗なんです」

扇奈「そう言われてみれば…塵一つ落ちてませんね」

剣道「…多分だけど、琥珀って普通の女よりも家庭的だよな」

ななな「…何だか女として大事なものを失いつつあるような気がします」

琥珀のスペックの高さに落ち込むつつあった4人だったが、そんな雰囲気も琥珀が持ってきた物を食べた瞬間、一転してしまった

扇奈「美味しいです」

本日、琥珀が作ったのはフルーツタルトとスコーン  
どうやら好評だったため、琥珀も嬉しそうだ

「良かった、タルトは何度も作ったことあるんだけど。スコーンの方はどう？ そっちは初めてなんだよ」

剣道「美味いよ、これはいくらでも食べられそうな気がするよ」

きなこ「でも体重が増えてしまいますよ？」

ななな「うう……」

「ま、まあ一応カロリーオフできるよう砂糖とかは出来る限り使わないで作ったから」

きなこ「おおっ、女性に優しいヘルシーデザートという訳ですね。

グリモアちゃんにもぜひ食べさせたい位ですね」

「ああ、そうそう。きなこ、さっき頼まれたグリモアの投げ所の人形の補修、やって置いたぞ。これでいいかな？」

きなこ「おお、これはこれは。どうもありがとうございます」

剣道「なあ琥珀、今日は晩飯何作るんだ？」

「一応、ビーフシチューの予定だよ」

剣道「な、なあ？ 今日弓道と一緒に食べてもいいかな？」

「ふふ、良いけど。そんなに気に入ったの？」

剣道「琥珀の料理は一流レストランの味にも劣らないからね。それにあたし達と一緒に食べる時はカロリーとか凄く気にしてくれるからね」

「せっかく食べてもらうのなら気持ちよく食べてもらいたいからね」

剣道「じゃあ、またあとで弓道に連絡しないとね」

ななな「わ、私もいいですか？」

「ああ、構わないよ」



扇奈「ふふ…」

「?」どうかしたの」

扇奈「いえ、皆さん楽しくそうだなって思いました。それから…琥珀さんってやっぱり素敵な人ですね」

「そ、そうかな?」

扇奈「はい　ますます好きになってしまいそうです」

3人「ㅋㅋ」(ピクツ)「」

「そ、そういうこと大声で言わないでくれないかな?　は、恥ずかしいからノノノ」

扇奈「ふふふ」

ガシッ

きなこ「扇奈さん?」

剣道「ちよつと話があるんだけど」

ななな「お、お時間頂けますか?」

扇奈「…(キュピン)　はあはあ、成程、そういうことですか  
いいですよ」

剣道「悪いね。　琥珀、またあとで来るから料理よろしく」

そう言い残し、四人は琥珀の部屋から出ていってしまった

「…何かななと剣道ときなこ、少し殺氣立ってたな。何だったんだ？」

鈍いとかそういう以前に経験不足のため女心を理解できない琥珀なのであった

「…まあいいか、そんなことよりも　きよっつはビィフシチュ  
ふんふんふんもっふ」

シオンの癖その一

料理する際に必ずと言っていいほど妙な歌を口ずさむことだが、周りは止めようとしなかった

何故なら…男の子と思えないくらい可愛いから！…！！　だそ  
うだ

「らんらんらん、しゅわっちー！　（ザクッ）　へいへいね  
しょうへいへい。…しょうへいへい  
い？」

ジュウジュウ……

コトコト…

・  
・  
・  
・

キングクリムゾン！　すべての時間は消し飛ぶ！！

なんてやってるうちに特製ビーフシチューの完成  
味見済み

「…ふむ、今日は８９点と言った所かな？」

上手に出来ました

という効果音が頭の中で響き渡ったような気がした

「とりあえず盛り付けやはら扇奈達に戻ってきたらにしよう」

という訳で始めましたのはティーズ（P P・ver）です  
「…（ピロピロ）」

それから一時間後…

今死ね！直ぐ死ね！！　骨まで砕ける！！！！

「チョッ！？　www　ここでそれは鬼畜ですから！！　とあぶね  
！！　ふう、俺のジュー　スが何とか止めを…　よし！！」

崩龍斬光剣、消えろ！見切れるか！　喰らえ！翔破裂光閃！！  
貴様に見切れる、術もない…

ぶるるるるるるるあ————!!!!!!

「ふう、何とか倒したな」

ガラッ

扇奈「も、戻りました…」

「ん、遅かったな……ってどうしたんだ？ 皆何かボロボロだけど」  
剣道「…気にしなくてもいいよ」

「そ、そう？ でもそんな汚れた格好で食事って言うのはどうかと  
思うし…まずは怪我の治療からしようか」

ななな「うう…す、すいません」

「…謝るのならどうしてこうなってるのか聞きたいんだけどね」  
きなこ「そこは聞かないところでですよ」

「まあ確かにね。っと弓ちゃんは無傷みたいだね。じゃあ、分担し  
て怪我の処置頼めるかな？」

弓道「あ、はい」

「じゃあ俺は…（じー…x4）……あの、皆さん？ どうしてそ  
んな目で俺のことを見ていらつしやるのでしょうか」

扇奈「いえ、怪我の治療は是非琥珀さんにやってもらいたいと思っ  
まして」

剣道「あたしもだよ」

ななな「あ、そ、その…わ、私もお願いしたいです」  
きなこ「ほわ、琥珀さん。私も頼めますか？」

「……いや、俺と弓ちゃんて分担した方が早いし、それに食事前に  
風呂入った方がいいだろう？ 丁度、この部屋の奥に露天作っても

らつてあるから皆で入つてきたら？」

弓道「ろ、露天を作ったんですか？」

「ああ、俺風呂好きだし。因みに岩風呂と洗い場とサウナ付だから」  
扇奈「本格的なんですね」

「まゝ、長い時は2時間入ってるくらいだしな。それくらいの設備が欲しいって言ったら用意してくれたんだよ」

ななな「よ、良く用意してもらいましたね」

「んゝ何か今回一番の功労者とか言われて、何か欲しいものないかって聞かれたから。それで露天風呂欲しいって言ったら」

剣道「ゝ用意する方もする方だけどゝ露天欲しいって言う琥珀も琥珀だね」

「そうかな？ 風呂は心の洗濯場所でもあるし、せつかならない湯につかりたいでしょ？（ピーーツ）っと、ちょうど湯船もお湯が溜まったみたいだ」

きなこ「？ タイミングいいですねゝ」

「まあ俺が入る予定だったからな。このまま今日は来ないんじゃないかと思つたし」

扇奈「ゝ何だか悪いですね。色々な意味で」

「気にするな。っと、扇奈の治療終わりっと」

扇奈「え！？ い、いつの間に…」

「ん？ 話をしてる間だよ。因みにもうななときなこの方も終わってるよ」

ななな「あ、ほ、本当ですね」

きなこ「話に夢中になり過ぎて気が付きませんでしたゝ」

「剣道の方は弓ちゃんがやってくれてるから。それに三人ともさほど酷い怪我はしてないし。むしろ浅い傷ばかりだね」

剣道「どうして私だけゝOTZ」

弓道「お、お姉ちゃん？ 大丈夫？」

「ゝまあそれはそうとゝ皆風呂入って来なよ。っと、それからはい

これ。タオルと一応、俺の服。サイズは合わないだろうけど、汚れた服よりいいでしょ？ 今着てる服は脱衣所にある洗濯機に入れておけばいいよ。あ、でも下着は止めて。俺、無理だから。流石にそれは部屋に戻ってから着直してくれ。加えて俺は部屋から出てるから。そうだな：大体30分くらい経ったら戻ってくるから」

扇奈「：それは何だか私達が琥珀さんを一方的に追い出してる感じがしてしまいます」

きなこ「：（ニヤリ） なら琥珀さんも一緒に入るといふのは？」

剣道&扇奈「：その手があつたか（ありましたね）」

ななな&弓道「：え、えええ~~~~~!!!!!!?」

「……な、何言ってるの？ え、俺の幻聴だよね？」

扇奈「いえ、ですからこのままだと一方的に琥珀さんに迷惑をかけたばかりじゃないですか？ ですからせめて、お風呂でお背中くらは流そうと」

「き、きききき却下あ~~~~~!!!!!! あり得ませんから!!!  
何それ!?!?!」

剣道「いや、だから一緒に風呂に」

「だから何それ!?! も、もももももつとは、はははは恥じらいをもちなしゃい!!?!?!」

噛んだ

女性関係に全くと言って良いほど免疫のない琥珀

今なら山本無頼と仲良くなれる様な気がしないでもない

「 そ、そうだ!! なななと弓ちゃんは嫌だよね?! 嫌だと言ってくれ!!!!」

何だかこのままだとズルズルと引きずられて行きそうな予感がして

しまった為、琥珀は何とか脱出路を見つけようと必死だ

弓道「え、えつと…わ、私は…その、遠慮したいかな」

「（弓ちゃん、GOOD JOB!!b）」

剣道「ん、じゃあ弓道はあたしたちが風呂にいる間、ここで待ってなよ。直ぐに出るから」

「……（・3・）あるえ？　なんか逃げられないのは変わってない？　く、こうなったらななに賭けるしかない!!）」

一連の希望を託し…

「な、ななは嫌だよね!？」

なな「え、えと／／み、皆さんが入るのでしたら／／わ、私も…」

「…Oh、No」

扇奈「さて…（がしっ）」

剣道「行こうか（ガシッ）」

きなこ「そうしましょう（ガシッ）」

ズルズルズルズル…

もう琥珀の意思とは無関係に風呂場に連れて行かれてしまった  
そこで何があったのか…言うまでもない

「…た、耐えきった／＼／」

一部危ない場面もあったが、昔兄、翡翠によって鍛えられた精神修行が功をなし、迫りくる四つの女体からの誘惑（？）に耐えきった琥珀だった

扇奈「立派でしたね」

剣道「あゝあ、あたしも男だったらあんな筋肉欲しかったなあ」  
ななな「た、確かに…琥珀さん、凄く鍛えられてました」  
きなこ「ほわ、あれだったら…」

「…OTZ」

何だかもう男として凹みまくっている琥珀だった

今日はアギトに自分の傷口抉られるわ、扇奈に襲われるわ、恐ろしい男に遭遇するわ、Alive Hell（生き地獄（笑））に連行されるわで散々な日だったようだ

狼牙はと言つと…

久那岐「狼牙…」

狼牙「久那岐…」



委員長とのいちやいちゃが終わり自室に戻る途中に今度は久那岐の部屋に直行してた  
どうやら狼牙は琥珀とは違って最良の日のようだ

「……ハア」

弓道「だ、大丈夫ですか？」

「うん……」

弓道「ど、どう見ても大丈夫そうじゃありませんね。スイマセン、お姉ちゃんが」

「……良いよ、ちょっと疲れたただけだから」

弓道「……その割には顔が凄くやつれてますけど」

「気のせいだと思ってくれ」

弓道「ハ、ハア……」

琥珀は現在、弓道と共に夕食の支度中

他の4人はというと何を思ったのか風呂から出たと思ったら各自の部屋（扇奈は現在、仮部屋を使用してる）

因みに服は琥珀が貸したものを着たまま出て行ってしまった

弓道「……お姉ちゃん達、一体どうしたんでしょうか？」

「……これだけは言える、凄く嫌な予感がする」

弓道「あ、あはは……でも琥珀さんって凄く不思議な人ですよね？嫌なら嫌って言えばいいんじゃないですか？」

「……とりあえずあの4人が俺に対して好意を持ってくれてるのは一

応理解はしてるつもりだから」

弓道「あ、そこには気が付いてたんですね」

「いや…あれだけされれば余程の奴じゃない限り気付くと思うぞ？」

琥珀はこの一日で女性関係の経験値を5000手に入れた  
LVUPした

琥珀は女性の気持ちに気付きやすくなった

「…（今一瞬変なモノログが頭の中に流れたな） ま、まあ…とりあえず行為を持つてくれるのは嬉しいんだけどさ。俺は節操なしにはなりたくないからね。ちゃんと気持ちを整理してから付き合うかどうかを決めるようにしたいから」

弓道「クスッ、狼牙さんとは対極的ですね」

「…どういう意味？」

弓道「え、琥珀さん知らないんですか？ 狼牙さんって、もう咲苗さんと瑞貴ちゃんに手を出してるって噂が学園で広まってるんですよ？」

「……………」

え、えっと…確か久那岐さんも狼牙の女って言ってたよね？  
ということとは…もう三又？  
節操無さ過ぎない、狼牙…

「…とりあえず俺は俺のペースでやらせてもらおう」

そう静かに心に誓った琥珀なのであった

食事の用意を完全に終えた頃、扇奈、剣道、きなこ、ななの四人はようやく戻ってきたただし…

「…おいこら、その荷物は何だ？」

扇奈「今は気にしないでください　それよりもお腹すきましたね」

剣道「お、もう用意できてるじゃん」

きなこ「早く食べましょう」

「…もう何言っても無駄な気がするからさっさと食べて寝よう、うん」

だが…

これで終わりなんて安易な夜を扇奈達が許してくれるわけなかった…

## 琥珀にとっての長い夜

食事を始めてから30分後、ようやく皆食べ終え、今は扇奈とななが片付けを担当することになった

琥珀と弓道、剣道ときなこはそれぞれ部屋で満腹気分を味わっていた

弓道「けぷっ…うっ、少し食べ過ぎてしまいました」

剣道「仕方ないんじゃないか？ 琥珀の作る料理は激ウマだしね」

きなこ「ふう　…お腹がこなれてくるまで時間がかかりそうですね」

「……（シャツ）…ふむ」

ガールズトークキングを楽しむ三人に対し、琥珀は鬨京の情報を整理しているところだった

これからは更なる勢力拡大を目指すのだから情報というのは多くて良い物なのだ

とりあえず断片的ではあるが最低限の情報は入ってきたのでそれを頼りに琥珀は情報をまとめ上げた

因みに…情報源は秘密

琥珀の情報源は通常の情報収集法とは根底から異なる為、出来る限り他者にばれたくないのだ

「とりあえず…分かっているのはこの鬨京はPanzergruppe Gynjou…通称、PGGの支配下にある地域だ。ここで鬨京の制圧に遅れてしまった場合、PGGの戦車に攻め込まれるな」

ここも時間の問題となりそうなため、情報は命と同等の価値がある  
ということを再認識する  
慎重かつ、重要な情報は出来るだけ迅速に手に入れて行かなければ  
ならない

闘京の主な学園は戦争寺学園と750学園

戦争寺の方の番長は金剛丸三蔵、通称は【鉄壁の金剛】  
何でも兼任で応援団長もやってるらしい

戦闘力もさることながら他の学生から高い評価を得ている

…狼牙、もしくは琥珀でないと対応できぬ存在

その下には金剛丸彩  
番長である三蔵の妹だ  
通称【鉄血の金剛丸】

こちらもそれなりの戦闘力を持っているそうだが…

恐らく、扇奈、剣道、久那岐、絵梨花辺りでも対応は可能である  
琥珀はそうふんだ

他の有力な配下として、堀田大吾、加倉井潤などの存在がある  
学生は基本的に己の鍛え上げられた身体と弓や木刀などで戦って  
くるそう

一方で、750学園の方の番長…というべきだろうか

この学園は暴走族【獄煉】が支配しており、そのヘッドが韋駄川煉  
こちらもちょうどかなりの戦闘能力を保持しているそうだ

加えて、こちらは近々P G Gからの脱退を表明する動きを見せてい  
るとか…

韋駄川煉の目的は…狼牙と同じ全国制覇

こちらにも狼牙、もしくは琥珀でないと対応は難しいとされる

配下として飛谷摩利夫と崎村竜二

こちらの学生はバイクに乗った学生が襲いかかってくるそうだ

「ふむ…」

情報を整理したところから、学生の質や総数はほぼ同じ

だが一般の学生の戦闘力…というより実質的に戦える生徒の総数は  
おそらく

750学園＞戦争寺＞聖城

聖城の生徒はついこの前までアギトへの恐怖によって支配されてい  
た故に、戦える生徒は極端に少ない

いや、数える方が多いと言ったところだろう

今、急ピッチで鍛え上げてはいるが…間に合う訳はないだろう  
出来るのは事後処理と言った所だ

その上、750学園の方はバイクを使用してくるということであらぬ恐怖を与えてしまいかもしれないという可能性があった

だが、一つだけこちらに勝機がある

それは…指揮が出来、自らも戦えるという学生が他の学園よりも多いということだ

狼牙と琥珀を筆頭に咲苗、豪（戦力外）、絵梨花、剣道、弓道、無頼は指揮が出来る

扇奈はまだ未知数なのでカウントに入れないが、戦闘力に関しては信頼してもよいと言えた

戦闘力としてカウントできる面々は、久那岐、兵太、有紀、瑞貴、きなこ、ショーコ、サキ、伊集院玉利、フランシー又は戦闘やその他の補助などに向いている為、前線にも出て来れるだけの力を有してる

つまりは戦うという経験の薄さをいうなれば力のある生徒の数で補い、一般の生徒の気を盛り上げようということだ  
そのためには…

「…どちらでもいいから有力な能力者を捕えて士気を上げるか」

難しいことだな

敵が前線に出張ってくる可能性も低いだろうに

…兎に角もつと情報があるな

扇奈「終わりました                      あれ？    琥珀さん、何をやってるんですか？」

「ああ、御苦労さま。いや何、集め終わった情報を纏め上げてるんだよ」

テールの上にはいくつものノートが積み重なっていた  
それぞれの表紙には様々なタイトルやナンバーが書かれている  
どうやら一冊では収まり切らなかった物もあるようだ

剣道「うわ、これは凄いねえ」

きなこ「【聖城学園生徒用トレーニング方法】、【PGGについての考察】、【有能なB能力者の情報】、【未だ変わらぬ情報】」  
ななな「こ、こっちには【悪い噂を持つ敵】、【謎】…謎？    なんですかこれ？」

「ああ、それはいくら調べても分からなかったことを書き留めたんだよ」

扇奈「うわわ、これはこの学園の生徒の戦闘力をまとめた物ですか？    こんな物書いて誰かに盗まれたりしたら大変じゃないですか？」

「大丈夫、これらは俺しか知らない隠し場所に隠してるし…ある程度ここに書かれてる情報は頭の中に残ってるから」

剣道「大層な自信だね？」

「三年間位旅しながら、情報を書き留めてたけど誰にもこれ盗まれたことないしね」

扇奈「…【護国院についての考察】…琥珀さん」

琥珀「…多分、扇奈の知りたい情報はまだ掴めてないよ。でも安心して、全国進出する準備が整えばそれも可能になるから。だから約束して欲しい、絶対に一人で護国院に向かわないって」



扇奈「…どうしてですか？」

「扇奈は恐らく誰かに追われてた。無数の刀傷や火傷はその証拠だ。故にそちらに戻れば再び襲撃を受ける。最悪、今度は死ぬことになるかもしれないってことだよ」

扇奈「あ…」

「後は…可能性は低いかもしれないけど、誰かが扇奈をおびき出そうとしたりする可能性も否定できないね」

きなこ「はわゝ、どうしてですか？」

「…扇奈の傷、どれも急所を外していたからだよ。綺麗なくらいにね。だから、そのおつていた連中にとって扇奈は殺してはならない、捕まえるべき存在だということなんじゃないかって…」

ななな「す、凄いです…」

弓道「琥珀さん、全国制覇し終えたら探偵か刑事になった方がいいのでは？」

「ああは、俺はそのつもりはないよ。とりあえず世界を旅してまわってみようと思ってる」

扇奈「世界…ですか？」

「うん、俺は旅することが好きになってから、もつと色々な場所を見て回りたい。そう思ってきてね、だから日本すべてを回り終えたら今度は世界を見て回りたいってね」

扇奈「素敵な夢ですね……分かりました、琥珀さん。私は絶対に一人で行動はしない様につけます」

「ああ、約束してくれ」

後にこの約束が大きく影響してくるのだが…  
そのことを今は誰も気が付かなかった

扇奈「それはそうと…琥珀さん、皆さんでゲームをやりませんか？」

「ゲーム？ 別にかまわないけど…何をするんだ？」

扇奈「そうですね…とりあえずそのことを他の皆さんに聞いたら色々借りることが出来たんですけど」

「…さつき部屋から出て行ったのはそのためなの？」

扇奈「それもあるということです」

「…じゃあ手始めにジェンガでもやるか？」

きなこ「ん、ただゲームをやるだけと言うのも面白みに欠けますし、どうせなら罰ゲーム要素も加えましょ」

剣道「お、いいね。じゃあ、罰をかけた紙を各自5枚用意して負けたらそれを引くって言うのはどうだい？」

ななな「こ、怖いですけど…皆さんがそれでいいのなら私はいいです」

「…凄く嫌な予感がするけど、まあいいよ」

弓道「同感です…」

静かに始まりを告げた琥珀、扇奈、剣道、弓道、ななな、きなこのゲーム大会

一回戦目は先程言った通りジェンガになった

口にしただけあって、琥珀は異常なくらい上手かった

本気でギリギリのところからばかり抜き出し、上に乗せていったため後半組はハラハラドキドキしざるを得ずにいた

そして…

ななな「あっ…」

ガチャガチャガチャ…

崩してしまったのはなななとなった

扇奈「という訳で」

剣道「ななな、罰ゲーム。さあ引いて引いて」

ななな「うう…あ、あまり厳しくない罰ゲームでありますように…  
(ゴソゴソ)」

弓道「どうでした？」

ななな「…【だ、男性を誘惑しろ】でした」

「誰だ！？ これ書いたの！！ 男性って俺しかないだろ！！  
何この限定的な罰は！！」

罰と言うよりも嫌がらせみたいな感じになってるね

きなこ「えゝ、そうですか。グリモアちゃんもこれでいいって言  
っていたので」

「…その似非妖怪貸せ。綿抜いて魂引きずり出した後、燃やし尽く  
してやる」

剣道「そんなことよりも…」

扇奈「罰ゲーム執行です」

ななな「え、ええと…でででもどうすれば／／／」

扇奈「(ボソボソ)」

な　な　「え、えええええええー！！！！？」　むむむむむり  
でしゅよ！！！！／／／」

扇奈「……ですがここで琥珀さんにアピールしておかないと……」 小声

ななな「う、うっううう……わ、分かりました。や、やります!!」

なんだか凄く思い悩んでいたななだつたが扇奈の誘導(?)によつて決心したようだった

その光景を見て琥珀は凄く嫌な予感しかしなかった

パ  
ラ  
ッ  
:

何を思ったのかなながいきなり服をはだけ始めて！！？

「何やってんの!？」

「ば、罰ゲームです」

「ストリップショーじゃないんだから!!」

脱がなくてもいいよ!

「つーか何で脱ぐ……ハッ！！ 扇奈だな？ 扇奈の発案だな！  
！」

扇奈「いやですね。何を言ってるんですか、琥珀さん  
んな誘惑のし方はどうかと言っただけですよ」

私は唯こ

「嘘だ!!!」

剣道「そうこう言ってるうちに、ななはもう準備終わってるよ」

「ハッ！？ いつの間に……」

琥珀はふと何気なくななのいた方を向いてしまった

ななな「え、えと…／＼／」 半脱ぎの下着のみ着用  
「ブッ!？」 ちゃっかり見た後、全力で目を逸らす  
ななな「あ、あの…琥珀さん／＼／」  
「な、なんだ!？」  
ななな「そ、その／＼／」  
「…ふ、服着てくれ／＼／ 話はそれから聞くから…」  
ななな「ははいいい!!／＼／」

余程恥ずかしかつたのか、なななは直ぐに脱いだ服を着直した

その間、琥珀は顔を真っ赤にしながらもそちらをずっと見ずに天井をずっと見つめて精神集中し、先程の光景を頭の中から削除することになり必死になっていた

扇奈「あゝ、駄目ですよ」

剣道「そうそう、罰ゲームなんだから」

「…もう十分だから、お願いだからこれ以上は…」

剣道「お、お姉ちゃん流石にこれは…」

扇奈「仕方ないですねゝ、じゃあ次に行きますかゝ」

「え…」

きなこ「罰ゲームは？」

剣道「勿論有りで」

「…拒否権は？」

剣道&扇奈「「ない（ありません）」」  
「デスヨネー」

そして再びゲーム再開：

それから6人はポーカー、神経衰弱、爺抜き、UNO、人生ゲームなどで遊び、それに負けた者は過酷としか言いようのない罰を受ける羽目になった

扇奈「ふ、で、では…次のゲームで最後にしませんかニャン」

京堂扇奈

受けた罰：バニーガールの服着用&ウサミミ付き、語尾に【ニャン】をつけてしゃべること

剣道「さ、賛成だよん」

中西剣道

受けた罰：マイクロビキニ&エプロン着用、語尾に【よん】をつけて喋る

弓道「うつ…な、なんでこんなことに…どすこい」

中西弓道

受けた罰：<sup>ブルマ</sup>体操服&へそ出しルック、語尾に【どすこい】をつけて

喋る

きなこ「ほわぁゝ、確かにこれは色々と来ますねゝなのゝ」

月読きなこ

受けた罰：白のスク水&背中にはウサちゃんリュック、語尾に【なのゝ】

ななな「はうとうとうゝゝ／／／こ、こんなの…もうお嫁にいけませんゝゝ／／／わ、わっしょい／／／」

根岸ななな

受けた罰：もはや紐としか言えない水着、語尾に【わっしょい】

「…何というか、自爆としか言いようがないな。って言うか誰がこんな罰考えたんだよ」

土御門琥珀、ほぼ常勝無敗のため罰ゲームなしの状態

というよりもこの罰は最下位のみの方が罰の書かれた紙を引くことになっていたため、琥珀は一度もビリになっていなかった

そればかりか一番悪い成績でも3位と言うもはやゲームを支配している状態と言いきれるほどの戦績だった

扇奈「ううう、琥珀さん強過ぎます〜ニヤン」

剣道「…どのジャンルのゲームも琥珀の独壇場だったような気がするよん」

きなこ「ほわ、ですがグリモアちゃんも言っていましたたが琥珀さんはズルやイカサマは一切やってませんですよ〜なの」

弓道「で、でもいくらなんでも不公平ですよ〜！！…どすこい／＼。何で私達だけ罰受けて琥珀さんは一度も受けてないんですかー！！どすこい…」

ななな「こ、琥珀さん。ゲーム強かったんですね…わ、わっしょい／＼」

「まあ、日本中回る際に裏賭博の出入りもしてたこともあったからね。賭けごとかでやるゲームはかなり強いつもりだよ」

剣道「あ、だから人生ゲームは3位だったのかよん」

「まあそついうこと。俺が得意なのはポーカーとか麻雀だからね」

どんな旅生活送ってたんだよ…

ななな「もしかして…琥珀さんって結構お金持ちなんですか？…わ、わっしょい」

「ん、一応銀行には十万ＢＰ程入ってるけど？」

剣道「じゅ、十万！？…あ、よん」

「まあ、一応それは口座の一つだから、全部合計したら結構な額になるかな？」



きなこ「ふええ、やっぱりお金持だったんですね」

「それほどでもないと思うが…それにその半分は兄さんから受け取った物だし」

扇奈「お兄さんですかニヤン？」

「ああ、俺の兄、土御門翡翠。何でも貯金が趣味だったみたいで、渡された時何か驚いたよ」

弓道「い、一体いくら入っていたんですか？…どすこい」

「ん、大体100万BPかな？」

ななな「ひ、100万！？」

「ん、でもそれ貰った後も殆ど使ってなかったから、溜まりに溜まってるってわけ」

剣道「いいな、私なんて月々どうやってやりくりしようか悩んでるのによん」

「？ 月々、皆はどれくらいでやりくりしてるの？」

弓道「皆、大体30〜50BP辺りみたいです。生活費とかは外してますけど、それが皆の平均的なお小遣いなんですよどすこい」

「ふ〜ん…じゃあさ、今度俺の奢りで買い物に行くか？」

扇奈「え…」

「扇奈もあらかた必要な物もあるだろうし…洗剤とかシャンプーとかの日用品とかね」

扇奈「あ、でもその分はもう咲苗さんから十分な額を頂いてますニヤン」

「服とかも必要だろ？ 今はそんなに替えもないだろうしね」

扇奈「あう…反論できませんニヤン」

「幸いなことに俺は殆ど金使わないし、使わないだけで貯金してるって言うのは勿体ないからね。世の中はお金を使ったほうが経済が良くなるって言うジンクス（？）もあるし」

剣道「えっと…なら甘えてもいいかなよん？」

「ああ、でもそんなに大勢の分は無理かな？ だからこの事は出来るだけ口外しないでくれよ？」

「ななな「も、勿論です！／＼／＼ あ、ど、どすこい」

「ん。で、最後のゲームはどうするの？」

「きなこ「もう夜も遅いですし…じゃんけんでどうですか？なの」

「俺はいいけど、皆は？」

「「「「異論なし（です）」「「「「

「じゃあ行くぞ？……………ジャンケン！！！」

ポン

琥珀…グー

扇奈…パー

弓道…グー

剣道…パー

きなこ…パー

ななな…パー

弓道「えっと…残りは私と琥珀さんみたいですな。どすこい」

「うわ…まさか初手で大勢が決まるとは油断したな」

弓道「じ、じゃあ行きますね？どすこい」

「ああ」

じゃんけん……ポン!!!

琥珀…グー  
弓道…パー

「……え」  
弓道「えっと…すみません。勝っちゃいました、どすこい」  
「…くつ、最後の最後で罰を受ける羽目になるとは…」  
扇奈「では引いてくださいニャン」

ガサゴソ…  
パッ

琥珀は一切迷わず一番最初に手に触れた紙を取り出し、広げてみた  
そこには…

【本日、二人誰かと一緒に寝ること】

「……………」  
剣道「？ 琥珀、何を引いたんだい？」

因みに現在は罰が終わった扱いになった為、語尾に余計な言葉をつけなくてもいいようになった

だがそんなことはどうでもいい

琥珀にとっての問題はこの罰ゲームであった

「……………」 完全に固まっている

扇奈「えっと…あらあら」

剣道「何々…へえ」

「し、しまっ…」

気付いた時には既に時遅し…

女性メンバー5人の中で最も行動力のある剣道と扇奈に罰の内容を見られてしまった

「OTZ」

土御門琥珀、一生の不覚…

扇奈「それで」

きなこ「琥珀さんは」

ななな「だ、誰を…」

剣道「選ぶんだい？」

「…（き、弓ちゃん！？ た、助けて！！）」 弓道にアイコンタクト

弓道「（む、無理です！！）」

何とか脱出ルートを探してみるも既に四方を固められている状態だった故…  
逃げ場なし

「こ、ここが俺の終着地点か？」

落ち着け、落ち着くん

こ、こんな時は素数を数えるんだ  
素数は2では割り切れない数…それは私を元気にさせて……くれるわけねえ………だろ……！！

く、どうすればいい…

そ、そう

こんな時は兄さんの教えを思い出せばいいんだ

えっと、確か兄さんには女性に対する扱い方って言う講座を開いてもらったっけ  
で、その時確か…

翡翠「琥珀よ、男とは女を守る存在である。故に男は強くあらねばならない」

「はい、兄さん」

翡翠「そして、閨でも男は強くなければならない」

「…は？」

翡翠「故に今日からお前には耐久訓練を用意した！！ 体にある力を一点に溜める力！ それを活用するのだ！！！」

「ひ、昼間から大声で何卑猥なこと言ってるんだーーーー！！！」

バキッ！！

翡翠「ぐはっ… ふ、こ、琥珀よ… 良い拳だ… ガクッ」

「……………」

ま、まともな事教えてもらってねーーーーッ！！

「くっ…」

扇奈「選んでももらえないのでしたら全員と一緒に寝てもらいますよ」

「ブッ！？ ハ、破廉恥過ぎるぞ！！ もう少し女の子なら恥じら

いを持ちなさい!!」

剣道「じゃあ選んでよ」

「……………《琥珀、心の中で葛藤中》く、くじをお願いします」

ヘタレともいえる回答となって結局琥珀の作ったくじを引いて決めることとなった

結果…

きなこ&扇奈「……………」

剣道「くっ…」

ななな「あう…」

弓道「ホッ…」

琥珀は扇奈ときなこと寝ることに…

「今日は…眠れないだろうな」

## 琥珀にとっての長い夜（後書き）

この後、狼牙は久那岐ルートで琥珀は扇奈ルートで行く予定なのですが…

煉と京子さんはどうすべきか悩んでいます

蓮も京子さんも結構好きなキャラなんですけどね…

あゝ、早くP G Gとの戦いを書きたい  
書きやすそうなので



## 琥珀の休日

チュンチュン…

朝日がカーテンの隙間から差し込むのが目に染みた

何故か？

簡単だよ

一睡も出来なかったからだよ！！！！

寝れるわけないよ！！！！

だって扇奈ときなこ、俺に抱きつきながら寝息を耳に吹きかけてきたり、悩ましげな声を囁いたりして来るんだよ！？

もう狼牙じゃないけど狼になっても普通おかしくないからね！！？

だから…一晩中、昔教わった封印術の術式とか悪霊退散の術式とかずっと頭の中で復唱してたよ

眠くて眠くてしょうがないけど…まあ皆を襲わなかったからよしとしよう

今現在もきなこと扇奈の二人に抱きつかれて起き上がることにすらできないでいる琥珀

現実逃避中…

皆が起きてくれたのはそれから約2時間後だった

「……………」

全く寝ていなかったため、琥珀は完全に目元にはくまが出来ていて顔もやつれていた

一方で扇奈ときなはまるで剥いたばかりのプリップリの茹で卵のような肌具合で満面の笑顔を浮かべていた

琥珀はかなり眠かったのだが、とりあえずその眠気を誤魔化す為に珈琲を砂糖なしで飲むことにした  
普段は紅茶なのだが、今日は致し方なしと言った所なのだろう

「（コクッ）苦っ！？ ちょっと豆多かったなあ」

「モグモグ…いや、琥珀さんの料理は本当に美味しいですね」

「そうですね、つついとお代わりしたくなります」

「琥珀はもういつでも御嬢に行けるな」

「……そうだな」

「「「……！！」「」「」

「…今日は突っ込まないんですね、琥珀さん」

琥珀が全く突っ込まずに剣道の冗談を肯定したため、琥珀に好意を持っている4人は驚きを隠せずにいた  
唯一、友人や恩人と言った感情を琥珀に対して持っている弓ちゃんが気になったのか琥珀に聞いてきた

「…俺はもう土御門家を感動されたも同然だからな。父上からは度々どうやってからは知らないけど手紙が来て帰って来いって言われてるんだけどさ。俺は…化け物扱いされているからね、本家でさ」  
「ば、化け物って…」

「仕方ないんだよ。俺の実家は元々陰陽師や呪術師何かをやっている特殊な家柄なんだけどね、俺はその歴史の中でもトップ5に入る位の實力の持ち主って言われてた上にB能力に目覚めたからね。それに…一度、能力が暴走して本家で大暴れしたことがあったんだよ。そのせいで…ね」  
「……」

意外としか言いようがなかった  
あれだけ優しくて強い琥珀が実家に帰ることが出来ず、父親以外の親族に腫れもの扱いされているという事実には…  
5人はそれ以降何も言うことが出来なかった

「…っと、そんなことは置いておいて。今日はどうする？」  
「え？」  
「とりあえず学園の方を制圧し終えたところだから、そろそろ鬨京制圧に動くだろう？ でもどう動くかはまだ決めかねてるだろうからさ」

「どうしてですか？」

「ん、実は獄煉がP G Gの離脱を表明する気配ありって言う情報が入ってるんだ。だから動くのはそれからでも遅くないかなって思ってるんだよ。一応、この件は狼牙と豪さんの二人と相談して決めることだけだよ」

「そうなんですか、でも本当に琥珀さんの情報網は凄いですね。もしかして…琥珀さんってB能力以外に何か特殊な力を使って情報を集めてるんですか？」

「（ギクツ）え、えっと…ま、まあかなり有能な情報屋が居るんだよ」

「……（ジュー）……」

「……さ、さあー！！朝食食べ終わったら早速狼牙と豪さんのところに行こうか！！　そうしようー！！」

「……あ、逃げた」

琥珀はその場を無理矢理やり過ごした後、急ぎ足で狼牙と豪のところに向かった  
まずは豪の部屋を訪れて、それから他の生徒に狼牙のことを呼んでもらおうと琥珀は考えていた

コンコン

「失礼します、豪さん。いらっしゃいますか？」

「ああ、その声は琥珀君だね。入ってくれ」

「はい」

琥珀は言われたとおり、部屋に入りそのまま椅子に座って一息ついた

「大分疲れているようだね」

「…分かりますか？」

「昨日はお楽しみだったのかい？」

「…いえ、というか俺の性格上それは無理だというのが分かりますよね？」

「ハハハ、そうだったね。じゃあどうしたんだい？」

琥珀は昨日あった出来事を伝えた

すると、豪は何やら面白いものを見つけたような顔を始めた

「ふふふ、君は本当に狼牙とは正反対の性格なんだね」

「…というと？」

「昨日はあいつは咲苗さんと久那岐の二人とお楽しみだったからだよ」

「久那岐さんは分かるけど…咲苗さんにまでか…」

本当にあいつって手出すの早いんだな

…まあそこは個人の自由か

「それで…今日俺の部屋に来たのは何の用があつてなのかな？」

「あ、そうでしたね。今後のことを考えようと思って」

「ふむ、ならさつさと決めてしまおう」

「…え、狼牙は？」

「今日は昼まで起きんだろう。さっきまで咲苗さんと久那岐の二人とにゃんにゃんしてたんだからな」

「……………」

「まあそんなことは置いておくとして…琥珀君、君の意見を聞こうか」

「そうですね、まず俺としては煉獄をこちらに寄せ付けないようにしつつ、戦争寺を無力化していくことをお勧めします」

「どうしてだい？」

「ハッキリ言いますと、獄煉と戦争寺を比べた場合、獄煉は機動力、そして戦争寺は質量と一人一人の戦闘力の高さが売りです。だから長期戦になった場合、残しておいてこちらが不利になるのは戦争寺の方だと思ってます。幹部の数も戦争寺の方が多いですからね。加えて、あまり悠長にこの二校を抑えるのに時間を費やしている暇はないです。最低でも1か月から2カ月の間にはどちらかを落とし、そして落としていないもう一方の方を直ぐにでも落とせるくらいにはしておきたいです」

「…だがそのためには資金がないぞ？その面はどうするんだい？」

「あ、それなら心配ないですよ」

「え？」

「兄さんが残してくれた資金と俺の個人資金がかなりありますから。闘京を制圧するには…多分、5000BP有れば大丈夫ですよね？引き抜きとかしたいのなら幾らか足しますけど？」

「……本当に君がいてくれて助かったよ」

こうして狼牙軍団は最初に戦争寺を攻めながら煉獄を無力化して戦力を地道に削っていくという案に出た

「さて、資金の方は後でこちらに持ってきますね」

「ああ、いずれそれは弟に返させよう」

「ハハ、まあゆったりと待ってますよ」

「さて、今日は仕事は私達がやっておく。だから琥珀君は少し外に出てきたらどうだい？」

「…そうですね、ちょうど扇奈の服を買ってあげると約束してましたし」

「そうか、序にいくらか買い物を買われてくれないかな？」

「ええ、良いですけど。請求書は？」

「勿論貰ってきてくれ。後でその分のお金は返すよ」

「分かりました、じゃあとりあえず今日外に行くのは俺と扇奈、剣道、ななな、きなこ、後は弓ちゃんです」

「ん、承ったよ」

琥珀はそのまま部屋を出ていき、自室に戻っていった

そして今日は皆で買い物に行くことが決定したことを伝え、部屋に居た女性たち全員が急いで服を着替えるために自室に戻っていた

琥珀はそれまでの間、今自分の手持ちのBPと必要な荷物の確認、そして一応今日のニュースなどを見て時間を潰していた

ほんの少しして、扇奈達が琥珀の部屋に戻ってきたため、全員で買い物に出た

まず最初に行く場所は豪に頼まれたものを買いに行く場所  
たんたん店である

「琥珀さん、ここって」

「ちよつと皆のために特殊なアイテムを購入することにしたんだよ」

「へえ…こんなところ、始めてきたよ」

「すいません」

「あゝ、はいはい」

琥珀がお店の人を呼び、店の奥から店員らしきおばさんが出てきた

「いらつしゃいませ」

「えっと、【不思議犬】、【シルバーリング】、【ぼわわ銃】、【ソノシート】、【素早い変な昆虫】、【便所掃除セット】…これくらいですかね。これらを50個ずつ頂けますか？」

「50！？ お、お客さん…お金は？」

「んつと…これで良いかな（ちゃりん）」

「じゅ、十分です！！ ま、毎度ありがとございます！！ではお



まけにこの【伝説のコロッケパン】をどうぞ!!」

「すいません、これを郵送って出来ますか？」

「あ、はい!! では住所を……」

「聖城学園にお願いします」

「はい、またのお越しをお待ちしております!!」

「さて、これで買い物終わりつと……ってどうしたの皆？」

今まで琥珀の後ろに居た扇奈達が目を丸くしていた

「…琥珀さん、全部豪さんが頼んだんですか？」

「うつん、これは俺個人の買い物。今回は俺の持ってたBPで足りる分だけ買ったんだけどね」

「……本当に琥珀さんってお金持ちですね」

「特に使う時間も買いたいものもなかったから貯まっただけだよ。それよりも今から銀行に行ってお金卸してから皆で買い物の続きに行こうか」

「あ、はい」

それから琥珀達はデパートやら某・量産店やら様々な場所を見て回り、買い物を楽しんだ

その際に不良と思しき連中に絡まれたのだが…

「………」 頭が地面に埋まっている

「地上版、リアル犬神家」

「うわゝ、これは幾らなんでも同情しちゃいますね」

「あはは、でもこいつらも相手を間違えたってことだね。ナイフ持  
って脅してきたし」

「で、でも琥珀さん。慣れてるんですね、こういったことに」

「…昔からこういった連中は絡んでくるからね。加えて今回は扇奈  
達もいるからなのかな。可愛い子たちと一緒に買い物してるのがこ  
いつらの気に食わなかったんだろうな」

「え、えへへ／／／」

「か、可愛いって／／／」

「まあこいつらのことは放っておこう、それよりも買い物も終わっ  
たし後は何処かで何か食べて帰ろう」

「くくくくはくくくい」「くくくく」

こうして琥珀達は休日を楽しんだ

その光景を物陰で見ている人物がいた…

「……………」

勿論、琥珀はその気配に気づいていたのだが

「（…今の、忍びだな。護国院の偵察部隊つてところか？ 今日、扇奈が俺たちと一緒に居ることがばれたな…暫く、扇奈の周りを警戒しておこう）」

「琥珀さん？ どうかしたんですか？」

「いや、何でもないよ扇奈」

## 護国院

「……以上が我が忍者部隊の偵察結果です」

「…そうですか、あの子は今鬪京に…ご苦労様です、下がってよろしい」

「ハッ！！」

そういうと忍びはその部屋から退出して行った

「…義経、どう思いますか？」

「…暫くは手を出さない方がいいと思う。よりにもよってあの土御門琥珀のいる聖城学園に身を寄せたなんて…態々虎の口の中に入っ  
て食べられに行くようなものだと思うよ」

「…弁慶はどう思いますか？」

「…オレハ、ヨシツネノイケンニ…サンセイダ」

「私も同意見だ。何せあの【レッドドラゴン】はかつて護国院内部に入り込み、我らの内部情報を盗み取り、学生184名を気絶させ難なく脱出したほどの実力者。恐らく、何の策も無しに闘京に向かって行けば手痛い攻撃を受けること間違いなしだろう」  
「では暫くの間は様子見をしましょう」

こんな会話が繰り広げられていた

因みに各地域での琥珀の評価と風評はそれぞれ異なっている  
ある地域では血も涙もない狂人

とある地域では優しき季節外れのサンタクロース

又とある地域では何故かキノコ狩りを堪能していた裕福な人

などなど…

場所によって様々な風評を得ていた

因みに護国院での評価は…

絶対に手を出してはいけない破壊神

と呼ばれている

Side Out

「ただいま」

「おう、今戻ったのか？」

「……狼牙、今起きたの？ もう17時だよ？」

「いや、15時には起きてたぞ？」

「……………ハア……………」

「な、何だよ」

「狼牙、ハッスルするのは良いけど学園の番長って言う自覚持ってるね？」

「あ、ああ」

「まあそれはそれとして…狼牙、小包届いてないかな？」

「え…っと…委員長？」

「着てるわよ、少し前に届けに来たみたいね」

「それ、豪さんに頼まれて買ってきた品だから豪さんに渡しに行かないといけないんだよ」

「何を買ってきたんだ？」

「今後の全国制覇に必要なになってくる品物。あ、これは狼牙に渡しておくね」

「あん？ 何だこれ？」

「ネコル金貨、持つてるだけで金運が上がるっていうやつだよ。狼牙、今金欠でしょ？ 少しでも運が向いてくるようにって思ってね」「おお、ありがとな」

「咲苗さんにはソノシート、攻撃の命中率を上げるアイテムだよ」  
「あ、ありがとう。でもいいの？」

「どの道、殆どの人に渡す予定だったからね。次に兵太。攻撃力が低いのが難点だけどそれ以上に回避行動が苦手なのが難点だから素早い変な昆虫、これは持つだけで少し体が軽くなる効果があるから有効に使ってよ」

「お、おう！　ありがとうございます！！」

琥珀は次々と購入してきたアイテムを渡していった

渡したアイテムとその相手のリスト

斬真狼牙	ネコル金貨
日比生咲苗	ソノシート
天狼久那岐	ぽわわ銃
陣内兵太	素早い変な昆虫
成瀬有紀	ぽわわ銃
中西剣道	シルバーリング
中西弓道	ぽわわ銃
宮里絵梨花	ぽわわ銃
シヨーコ	不思議犬
サキ	ソノシート
月読きなこ	シルバーリング
山本無頼	素早い変な昆虫
伊集院玉利	不思議犬

フランシーヌ山吹 不思議犬  
堂本瑞貴 ぼわわ銃  
根岸ななな シルバーリング  
斬真豪 ネコル金貨  
京堂扇奈 シルバーリング

大体こんな感じになった

やはり主力となる狼牙たちは攻撃力や回避行動能力を高めるという効果のあるアイテムを選んだが…

「何で扇奈、剣道、ななな、きなこはシルバーリングなの？」

「それは」

「秘密なのですよ」

「~~~~」

「え、えへへ」

何故か機嫌が良い4人なのであった

周りに居た人間は誰しも理解したのだが…  
唯一、琥珀だけはそのことを全く理解していないのだった

「所で琥珀はどのアイテムを持ってるんだ？」

「あ、俺はこれ」

そう言っただけから出したのは【身軽の羽DX】

「これ…どういう効果があるの？」

「簡単に言くと身体が身軽になる。俺は足技とか素早さがネックの戦闘スタイルだから」

「これ、どこで手に入るの？」

「秋波原にあるてんでん本店で手に入るよ。俺は旅してたから手に入れられたんだよ」

それから琥珀はアイテム配布を咲苗を主に任せ、自身は豪の元に向かった

コンコン…

「失礼します、豪さん」

「お、帰ってきたね。で、注文の品はどうだった？」



「とりあえず最新のパソコンと豪さんの希望していた情報屋のこととかは何とか目処がたちました。でも俺もいるのに情報屋なんて要りますか？」

「念のためだよ、それに君の持つてる情報だってすべてが完璧に正しいわけではないだろう？」

「まあそうですね」

「じゃあ請求書貰えるかな？」

「あ、はい。これですね」

「……ふむ、かなり安く済んだようだね」

「まあ交渉しましたから」

「琥珀君に任せておいて正解だったね。ありがとう」

「いえ、では俺はこれで」

こうして幾分か騒がしい琥珀の休日終わりを告げた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7332m/>

---

大番長～白き狼と紅き龍～

2010年11月6日20時23分発行